

緋色の王 太極の乙女【完結】

につけ丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたら知らない女の子と檻の中に入っていました。

目次

0.	愚者(ぐしや)	1
1.	魔術師	6
2.	女教皇	10
3.	女帝	14
4.	皇帝	17
5.	法王	21
6.	恋愛	27
7.	戦車	32
8.	剛毅	35
9.	隠者	37
10.	運命	45
11.	正義	49
12.	刑死者	52
13.	死神	55
14.	節制	60
15.	悪魔	63
16.	塔	68
17.	星	71
18.	月	80
19.	太陽	85
20.	審判	89
21.	世界	93

0. 愚者（ぐしや）

物事には必ず表と裏がある。

例えばそれは、世界が一つのカードやコインから生まれたかのように流転する森羅万象やありとあらゆる万物は、元をたどっていけば裏か表かのどちらかに分類できるらしい。

表と裏といってもそう簡単に割り切れるものじゃなくて偏りすぎず、留まりすぎず……干渉し合いながら一種の渦やうねりのように表と裏を行ったり来たり、転化を繰り返していくんだ。

うねりや渦は古代中国において相乗相剋する二つの相、太極、または陰と陽として言いならわされた。

ただ陰と陽にどちらが強いか、どちらかが全てを駆逐するとか、そういうものはなくて、片方に偏ればまた片方に偏りはじめる……変化し循環するうねりこそ森羅万象であり、対極の本質だと彼女は言っていた。

別に難しく考えることはない。

太陽だってそうだ。空に浮かんだ光り輝く生命の玉こそ、陽気の象徴。だから太陽と呼ばれた。月もまた対となる位置にあつて、かつては太陰と呼ばれ陰気の象徴だった。

太陽と月から生まれた世界だから、そこから生まれた人や草木にだって当然陰と陽はあつて人には陽の男、陰の女があつた。

陽気の象徴である太陽と、陰気の象徴である月の、浮き沈みがお昼や夜になつて毎日を繰り返す。

お昼と夜のどちらかが片方を呑み込んでなくなってしまう事がないように、二つの相を有するからこそ万物足りえたんだ。どちらか片方では万物とはいえず、片方だけの存在に意思があるならきつと対となる存在と和合しようと求め続けるだろう。

つまり万物には必ず表と裏があるんじゃないやなくて、表と裏があるから万物だった。

そして、あのとときの僕たちは裏側にいた。

僕たちは、虜囚だった。何時からだったかは、覚えていない。

あの日、目がさめると僕はもう檻のなかにいた。

殺風景な部屋と頑丈な鉄格子。そしていちまいの毛布だけがそこにあるすべてだった。

どうしてこんな場所にいるんだろう？ 昨晚は家族とすごして、ベットでねむりについたはずだったのに。

でも目の前には青い石くれと、銀色の鉄格子があつて……僕はたしかに檻のなかに閉じ込められていた。

閉じこめられていたのは僕だけではなかった。

”キミもつかまつちやつたんだね”

ふりむけば鮮やかな緋色の髪をもった女の子がいた。

無機質な笑顔をのせて、寝つ転がつていた僕をしずかに見下ろす少女。優しい容貌はアルカイックスマイルで彩られ、人間味を母親から教わらなかつたとも言うように熱を感じなかつた。

人間は美しいものには好感を抱くものだが、彼女からは日本人形じみた不気味さを感じ取つて少しだけ怖気を抱いた。

彼女の無機質さは青い石くれで象つた青褪めた仮面なのかと錯覚するほどで、それが彼女との出会いだった。

ここはどこですか。

身をおこして訊ねてみた。疑問が初めての会話となった。

”分からないよ”

膝を抱えた少女は困つたように返した。少女は部屋にひとつだけある丸窓を見上げ、僕もつられるように彼女の視線をおつた。

丸窓からは淡い星あかりが差しこんでいた。それがこの部屋でたったひとつの光源。

窓から差し込んだ丸い光は石くれに刺さつた杭を露わにして、点々と赤く染まつた石くれまで映し出した。

血だ、僕が驚くより先に彼女の言葉が遮つた。

”あれは北極星なんだろうね”

少女は空に浮かぶたったひとつの星を眺めてつぶやいた。

”だつてこの夜のあいだ、ずっとあそこにあるもの”

北極星。夜空に張り付けられたどこにもいけない星。

なぜ緋色の少女がそんなことを呟いたのか、あのときの僕にはわからなかった。

ただ、少女の淡い笑みが僕のなかにあつたはずの不気味さや恐れを払ってしまった。

あの、キミ、名前は？

僕の問いかけに彼女は小さく微笑んで、アマリスと名乗った。お手本のようなアルカイツクスマイルだった。

”キミは？”

今度はアマリスの問いかけ。問われた僕は名前を口からひっぱりだそうとして……失敗した。

いつもなら開かれていますはずの記憶の門がかたく閉ざされている。門を開いて先をのぞこうとしても、見えない壁が僕をはばんだ。

おかしい。

僕はたしかに家族がいた。

昨夜はベッドで寝たはずで、部屋にはテレビがあつていつも録画した映画を眺めていたはずだ。扉を開けて左に曲がると階段があつてすぐ下がリビングで……その先記憶を呼びもとそうと歯を食いしばって、もやの晴れた家族の顔はのっぺらぼうだった。

”どうしたの”

ぼうぜんとしていた僕に彼女は起伏のない声で問いかけてきた。

僕はハツとして場を取り繕うように「アキ」と答えた。

”そう。よろしくね、アキ”

やさしい言葉。でも僕は返事もおざなりに立ち上がると、鉄格子のまえに立った。

いてもたつてもいられなかったのだ。

鉄格子のおくは石と闇のしきつめられた回廊で、人の気配はどこにもなかった。丸窓の光も届かない無明は恐ろしかった。でも恐怖を飲み込んで、僕は叫んだ。

誰かいないか、ここからも出してくれ、なんでこんな所に閉じ込めたんだ、と。

ただどいくら待っても返事はかえってこなかった。

”ねえ、アキは人間なんだよね”

混乱と恐怖に支配されそうになった僕に、アマリスが質問を投げかけた。彼女のこえを聞くと、潮騒じみた血がおだやかになった。

きつと熱や起伏がなくて冷や水を浴びせられた印象を覚えるからだろう。

質問に小さくうなずくと彼女は、そうなんだ、と薄い笑みをうかべた。

”人を見るのはひさしぶり。ここに人はいないから”

人がいないって。キミも人間じゃないか。苛立っていた僕はすこし意地悪な答えを彼女に投げた。

それなのにアマリスはちつとも嫌な顔を見せず、彼女の返答もすこし変わった。

”ううん、わたしは人じゃないんだ。わたしにはあなたたち人にはない羽根があるんだよ。いまはとられちゃってるけどね”

クスクスと笑いながら語ったアマリスに、そのときの僕は全くもって真剣に捉えていなくて、後悔の時はすぐさま訪れた。

——唐突に睡魔が襲ってきた。

”時間だね”

彼女は困ったように、すこし嬉しそうに、つぶやいた。何が起きようとしているのか検討も付かなくて僕は咄嗟に、さつきまで眠っていたのに、と何度目かの困惑を口にした。

”ここは夜しかないの”

だから眠くなつたときが夜なんだ、そう語った彼女にそうなんだと答えるひまもなく睡魔に誘われるまま僕は目をとじた。

また目がさめると、彼女はいなくなっていた。

丸窓から差し込む光は少しも動いていなくて、夜しかないというアマリスの言葉は本当だったんだと悟った。

ふと、羽根がいちまいだけおちていた。緋色の、あざやかな羽根だった。

場所は星あかりの照らす先、杭の刺さった場所。緋色の羽根は真ん

中を杭で刺されて石くれに縫い付けられていた。

私はニンゲンじゃないんだよ。

リフレインする言葉と嫌な予感是一緒だった。

ぎい……。不自然な音にギョツとふりむけば鉄格子がひとりでにひらいていた。

直後、かなしばりにあった。

回廊のくらやみから這いであるようにアマリリスがあらわれたのだ。

”またとられちゃった”

困ったように、そして、すこしだけ嬉しそうに笑う彼女に僕のころはあとずさった。

それ、

なんで、

そんな、

どうして、

言葉にならないおえつが喉からせりあがる。僕は緋色の少女にすがりついた……。それしかできなかつたのだ。

だって、戻ってきた彼女に——両目はなかつた。

僕たちは虜囚だった。

檻から逃げる方法も、助けの求め方も、あ那时的僕たちは知らなかつたのだ。

1. 魔術師

アマリリスはむきしつなえがおをうかべて、わらった。

”わたしは大丈夫。だから泣かないで”

目をうしなつたはずの彼女は、謝りつづける僕にそんな言葉を掛けてくれた。

1番苦しんでいるのは彼女なのに、でもアマリリスは決して悲観していなかった。ともすれば喜んですらいて。

僕は気づいた。

きっと彼女はもとめられれば与えてしまう存在なんだと。

疑問があれば、質問の答えを。

挫けそうならば、人がほしい言葉を。

他人の願いを受けいれて、願いを叶えようとする人なのだ。

だれがキミからとつたの。僕の質問に。

”神様だよ、なまえはしらない”

隠すでもなく躊躇うでもなく、答えは当たり前まえのようにかえってきた。

怒りも憎しみも恐れものせず、ただ無機質に。

そうしてじぶんの身をささげてまで、彼女はだれかに与えようとするのだろうか。

名も知らない誰へ尽くそうとする姿は、ぜんまい仕掛けの人形じみていた。

僕のところがはなれていくのを、止められなかった。

でもみとめたくもなかった。だから僕は彼女をすくう方法をさがしはじめた。

彼女から彼女をうばうものは神様。

なんだそれ？ 僕の率直な感想だった。

けれどなぞだらけでも、手がかりにはかわりない。

牢のなかをぐるぐる回って、至る所をあさって思考をめぐらせた。創作物にあるような都合のいい抜け道も、便利な道具も見つからなくて、そもそも僕は凡庸なにんげんだった。

結局、答えも、手がかりも、見つかることはなかった。

ここから出る方法ないの？

困りはてた僕は、彼女にすがった。情けなくって仕方なかったけどもう手立てが思い浮かばなかった。

”わからない。でも、ここから必ず出してくれるってスミスは言ってくれたよ”

スミス。しらないだれか。

聞きだそうとしたけれど、とつても強いヒーロー。それだけしか彼女はこたえなかったし、しらなかつた。

からだをうごかせばお腹がすく。

でも檻のなかにたべものはなくて、石くれからにじむ水滴だけが飲み水だった。

アマリリスは食事をひつようとしない。食事もしなければ排泄もしなかつた。

人間ではなかつた。頭を振る。そんなわけがない。

でも僕は腹のむしが大いにないて、身からでる汚物をとめられなかつた。

時間とともに檻のなかは劣悪なものへと変わっていく。

そして状況も変わりはしなかつた。

帰ってきた彼女は左指がなかつた。

帰ってきた彼女は右足の骨がなかつた。

帰ってきた彼女は左の乳房がなかつた。

帰ってきた彼女は耳がなかつた。

夜がおとずれるごとに達磨へちかづいていく彼女。僕のこころはむしばまれていた。

無力をなげくばかりでなにもできない僕は、坂をころげおちるように歪んでいった。

帰ってきた彼女は頬がなかつた。——彼女と代わりたい。

帰ってきた彼女は爪がなかつた。——彼女へ変わりたい。

帰ってきた彼女は左の肺がなかつた。——彼女になりたい。

いつしか願いは変質していった。

——また”夜”がくる。

アマリリスはもう歩けなかった。ひとつになった肺であらい息をくりかえし、ひとつだけあつた毛布は包帯になっていた。

僕は彼女を、みることも、はなしかけるのも、やめていた。

水滴をかきあつめて水鏡をつくり、そこからのぞく僕に淡々とかたりにかけていた。

——キミはだれ？

——ぼく？ ぼくはアキだよ。

——ちがうよ。わたしはアマリリスよ。

——キミがアマリリスなら、アキはだれになるの？

——アマリリスは僕で私はアキだよ。おかしなこといわないでよ。

——あはは、そうだった、なら、僕はアマリリスだね

——うん、だってわたしはアマリリスだもの。

あるときを境に、僕はアマリリスだった。

その日の”夜”。

やはり”わたし”に睡魔が襲ってくることはなかった。

気づけば檻のそとにいて、ひとりぼっちで立っていた。

——ひた。 ひた。 ひた。

ブキミな足音。いつものように”神様”はわたしの^そな^の知^らない^いわたしのもとへ近づいてきた。

——ひた。

——ひた。

逃げる
来る

——ひた。

バケモノだ！
神様が

——ひた。

でもわたしは慣れたもので恐怖なんてかけらもなく、
なにを言ってるんだあれか助けて！
それを受けいれていた。

——？我？。

もどつてきた僕に、僕のこころは壊れた
右腕はなかつた。

ぼくはそのときはじめてこころのそこからわらえて。

アマリリスはむきしつなえがおをうかべて、わらった。

2. 女教皇

壊れてしまった彼女をこれ以上を壊さないように。

彼女がもうなにもささげなくていいように。

僕はその一心で”神様”にささげつづけた。

時には左足を。

時には鼻を。

時には歯を。

時には髪を。

時には皮膚を。

無力感。不安。あきらめ。こころの負を払拭しようとして僕は僕をささげた。

けれど”神様”は、僕からうばっても、彼女からもうばうことはやめなかった。

……それから幾度か”夜”がおとずれた。

僕にあったはずの四肢はいつの間にか左腕の一本しかなくて、かわのはげたイモムシじみた姿をしていた。

横たわる彼女は呼吸ばかりで、ずいぶんと会話をしていなかった。

僕は這うように彼女のとなりに向かう。

引きずるとむき出しの皮膚が灼けるほど痛かったけど、僕は痛みを”いたい”と感じなかった。

僕がささげるからキミは大丈夫。

毎夜のささやきが、僕と彼女のあいだに転がった。

僕がささげるからキミは大丈夫。
僕がささげるからキミは大丈夫。
僕がささげるからキミは大丈夫。
僕がささげるからキミは大丈夫。

何度も何度もくりえした。毎晩毎晩くりかえした。

彼女に見てほしくて、聞いてほしくて、褒めてほしくて。

僕が、キミにすべてをささげるから、キミは大丈夫。

”アキ”

はじめて彼女が返答した。彼女はゆるゆると僕のほほに残った手を添えた。

”あなたがわたしにささげてくれるなら、わたしはわたしのすべてをあげるから”

”だから、どうか、きずつかないで”

アマリリスは無機質な笑顔をうかべて笑った。

時間も感情も、僕から遠ざかった。

アマリリスは狂った人形だ。僕は断定した。

人のこころをどうやってか垣間見て、欲しがるものを与える。そう
いった機能をもった人形なのだ。

だってほら……さっきの言葉だって僕が何よりも求めていた言葉
と、一言一句変わらないんだから。

空に消し飛んでいた僕の意識がもどってきたとき、僕のゆびは彼女の
喉をおさえつけていた。

あはは。あはは。——ころそ。

家の玄関を飛びでるように、僕のこころは軽やかだった。

でも直ぐに……てのひらが喉にふれて直ぐに違和感が生まれた。

脈がなかったのだ。
呼吸は、している。
熱も、あった。

僕はいまさらながら彼女は人間じゃないと言う真実を本当の意味で理解した。

彼女は人間などではない。ただの血の通わぬ人形なのだ、僕は悟ったのだ

正気にもどった。奥歯を砕いた音がして、正気に戻る音がした。

ああ……………あゝ あああゝ あゝ あゝ あおおあゝ あゝ あゝ あゝ……………

けものうなり声は、たしかに僕で、それまでけもの以下だった僕にとっては高尚な叫び声だった。

すべてを与えるアマリリスは正常で、壊れていたのは僕だけだった。

ヒーローはあらわれない。

僕は鉄格子にすがりついて声なき声をあげた。

神様、お願いします。

僕からすべてを奪っていいですから、どうか彼女からも奪わないで上げてください。

神様、お願いします。

僕からすべてを捧げますから、どうか彼女から奪ったすべてを返して上げてください。

僕の祈りは真実、雷鳴となつて風雨をよんだ。

夜と北極星しかうつさなかった丸窓からは、雲とそれをまとう月が僕を見おろしていた。

ほうけていた僕に、睡魔がおそってきた。

”夜”だ。

ああ、これで……………。僕はかすかな安堵を胸に、目をとじた。

——目が覚めると、すぐに失っていたはずの部位に感覚が戻ってい

る事に気づいた。

彼女もいた。それも出会ったばかりの姿で。

僕は嬉しくなつて笑顔になった。

”神様”はわるものではなかった、本気でそう思った。彼女も笑顔をかべてくれた。

それは見なれた無機質な笑顔じゃなくて心からの笑み。

水鏡にうつるアマリリスは、とてもいい笑顔だった。

そう。

アマリリスは僕で、僕はアマリリスになっていた。

3. 女帝

僕が”僕”を認識できたのは半日がたったころだった。

受け入れてなんていない。ただ事実として受け止めただけ。僕は事実を事実として受け入れるまでアマリリスの影を探し続けていた。石くれの隙間を覗き、丸窓に登って転がり落ちて、鉄格子を揺らして彼女の帰りをまった。

でもどれだけ経つても彼女は見つからなくて、現れなくて。嘘という蜜蠟でできた虚飾が直面した現実という火で融けていくように、結局、僕は現実を受け止めなくちゃいけなかった。

嘘は優しい。現実を正しく認識した僕はどうしたかと言うと、あまりにも酷な現実にうめきをあげることしかできなかった。

こころを壊せるなら、壊したかった。

記憶を消せるなら、消したかった。

死ねるのなら、死にたかった。

でも自傷も、嘔吐も、泣くことも、僕はしなかった。できなかった。この美々しく人間離れた身体はアマリリスのカラダで、もう僕が自由に使うてはならなかったのだ。

それに彼女も”きずつかないで”と、言い残したのをおぼえている。それを翻してまで僕は自分を傷つけることも汚すこともなかった。ただ心だけが僕のもので、だからひたすら責め続けた。

水鏡の中にいる彼女になってしまった僕をみつめる。彼女は途方もなく——キレイだった。

緋色の髪。空色の目。白い歯に薄く艶やかな唇。ほつれた薄い服からのぞく均整の取れた肢体。まさに美の黄金比を備えた作り物だった。

彼女が僕になって、より近くで認識することで思い知らされた。

——アマリリスとは神に捧げられるべくして生まれた人形である。全てを捧げることを定められた神の供物である。

言葉が、不意におちてきた。

なにをいってるんだやめろ。彼女は”人”なんだ。

否定が思考を強かに打擲して、塞き止めた。肉体を傷つけずこころだけを引き裂きたかった。

けれど、そんな器用なマネはできなくて、不埒なかんがえはシミのように拭えやしなかった。

でも僕の理性とは対照的に、本能はそれを肯定した。血の通いはじめたアマリスという彫像が。僕の男としての部分をからめとる。

アマリスにはきつと、人間には知覚できない美しさがあつただ。それが僕という俗物がまじつて、僕たちの位階に落とされた。

唾を嚙下すると……いままで気づかなかつた部分が反応を示した。下半身だ。僕自身勘違いしていたのだが完全に女性の体になった

訳ではなく下半身には陰莖が付いていた。

いわゆる両性具有。

おそらく以前の彼女にはないもので、僕にはあつたものが主張をはじめていた。

……う、……あえ。

戸惑いがもれ、羞恥と怒りでほほに熱がおびた。

彼女の手でそんなものに触れるわけにもいかず、僕は右往左往をくりかえした。

だけど、ふと閃くものがあつた。

”ここ”だけは彼女じゃなくて、僕なのだと。

記憶のなかの彼女はまちがいなく女性のカラダをもっていた。それに見覚えもあつて。

きつと、僕はもう正気じゃなかった。

立ちあがった僕は檻のなかで走りだすと、そのままその部分を壁にしたたかにうちつけた。

絶叫。そして情けなく、うずくまつた。痛かった……肉体だけじゃなくて心までも。

自傷行為は結局、くりかえさなかった。

痛みもある。けれど、かすかに残ったジブンが消えてしまう……そんな恐怖がなによりはばんだ。

あするときアマリスの肉体を保つための奉仕者になる、と考えつい

ていたならもつと楽になれたのかなと少しだけ思う。

でも当時の僕は、情けなくて悲しくてどうしようもなくて。

死ぬことも選べない僕は、希死念慮と涙をおさえつけるために、僕はただ忘我した。

なにも聞かず、なにも映さず、なにも考えず、呼吸だけをくりかえした。

なにもできない僕は、なにもしないをえらんだ。

そして。

僕のかなしみなんて関係なく——”夜”は、きた。

4. 皇帝

その日の”夜”はいつもと毛色が違った。

なにせ僕は神様のすがたをわずかばかり見通すことができたのだ。もやがかつた影のなかに、どこかへびを思わせる人影がにじんできた。その全容は見通せなかったけど異形のすがたをしていた。

そしてもうひとつ。

神様に性別があるのなら、きっと女だ。

ふしぎな確信にはあった。

神様はのそりと大蛇じみたうごきで僕を、観た。

心身が硬直した。

射すくめられた蛙と化した僕に、神様は黒いかいなをのぼし、するりとなかに手を突きこむと心臓を鷲掴みにした。

まるで南極につき落とされた気分だった。

僕のこころは、文字どおり心のそこから凍りついた。

神様の手から、思念じみたものが、溢れた。

お前の願いは叶えた。

後はお前が私の願いを叶える番だ、と。

うでだけでなく、黒いカゲそのものが僕をからめとった。

——ホウギ。ホウギ。ホウギ。

僕の理解できることばを、はじめて神様はじゃべった。

……でも意味なんてわからず、怖気にかみ合わない歯をならすだけ。

理解不能な存在をまえに思考がまとまらない。
けれど神様がなにをしようとしているのか、それはわかった。

神様は”僕”を求めていた。”僕”とひとつになろうとしていた。

そのときの僕は、神様が僕をもとめた理由をしらなかつたし、しりたくもなかつた。
でも。

——モトメラレテイル。

澄み切った思いが、細胞からにじみでた。

僕のころからではなく、彼女のカラダから生まれたこえ。

さしだそう。ささげよう。ささえよう。あたえよう。僕のなかの
彼女がいう。

こころは懸命に拒絶をさけび、カラダは高らかに奉仕をさげんだ。
こころとカラダが乖離していた。
けれど離れることはない。なぜなら僕らは一心同体だった。
ゆつくりと、そして確実に、こころはカラダに引っ張られていた。

——ホウギ。ホウギ。ホウギ。

神様はむしり取る、ささげモノを。

そう。

むしり取っていたのは、決して奪ったモノではなかつた。

いま、アマリリスと同化して、やっと理解した。

彼女はすべてを与える存在だった。

彼女の代わりになりたくて僕は僕をささげた。

僕たちは、すすんで神様に、ささげていた。

神様は欲するだけで、ただあるのみだった。

ああ、おかしいのは神様じゃない。僕らだったんだ。

そのことに気づいたとき、僕から気力が抜けおち、うなだれて――

――そして私が現れた。……どうやら事態は、私を求めるほどとなったらしい――

ひとつの。

かつん。

かつん。

かつん。

足音が。

かつん。

——かつん。

彼は前触れもなくあらわれた。

次いで、あまりに奇怪な出で立ちに、僕の意識は釘付けになった。

肩からケープを翻し、素肌をのぞき見ることを一切許さない貴公子じみた装い。

手にはいかめしいリボルバー式の銃をもって。

極めつけに昆虫を思わせる黒い仮面で素顔を覆っていた。

気取った言葉遣いも相まって、どうみても奇人と例えるほかない、その人物。けれど。

——私はジョン・プルート・スミス。

——まつろわぬ神よ。冥王たる私の参戦が、これよりさらなる混沌をもたらすと知るだろう。

彼は悲劇に満ちた箱庭へ散歩をするように、訪ねてきて。

そしてそれを許される強大な力をもった、地獄を突き破る冥府の王で。

……ヒーローは、遅れてやってきた。

5. 法王

あれからジョン・プルート・スミスと名乗った青年にたすけだされた僕は、神様によって閉じこめられていた場所から逃げ出すことに成功していた。

囚われていた場所は高くそびえる塔だった。

遠くはなれたはずなのに、僕を見おろすのをやめない塔。

あそこにはまだ神様はいる。なら、きつと神様とはふたたび会うことになる。

確信があった。

塔から大きくはなれて、言葉もなく座りこんだ。

遅れてすまなかった。

座ってからすぐにスミスは小さな謝意を僕にかけた。

言葉を返せなかった。となりに腰かけたスミスは、ケープを肩にかけてくれた。

……アレは一体なんですか。

感謝も、喜怒哀楽も、すべて無視して、いの一番に疑問をぶつけた。

”スミスの答えは僕の震えが止んだころにやってきた。彼は”神様”を知る者だった。

神様とよんでいた影は、正真正銘の【神】。スミスは断言した。

そして神様の正体は【女媧】。それが神様の名だという。

荒唐無稽な話も、僕は受け入れることができた。だってこんな非常、どう説明すると言うんだ。逆に納得したくらいだった。

女媧。正直あまり聞き覚えのない神様だ。

これがゼウスやロキなんていう馴染み深い神々ならともかく、どんな神様なのか見当もつかなかった。

彼は女媧を【まつろわぬ神】とよぶ。

人に災いを運ぶ神の総称で、ときおり神々は神話から抜け出してしまいうらしい。原因は分かっていない。そして厄介なことに現実世界に現れた神は歪んで、神話に当てはめられた姿とは大きく乖離してしまいうらしい。

慈悲深い神でも人に災いをもたらす、といった具合に。

女媧、まつろわぬ神。言葉を転がした唇を噛みしめると、膝を抱えた腕に力がこもった。

知らなければならぬ。僕をこんな目に合わせた張本人を、知らぬ存ぜぬで済ませて起きたくなかった。

女媧のことを聞き出そうとする僕にスミスは答えず、ただ一言、靈視を使えばいい。そんなアドバイスを送るのみだった。

靈視？　僕が訝しんだ瞬間だった……——靈視が降りたのは。

女媧。山海経にも記される人首蛇身の女神。

中国全域に広く信仰をあつめる神で、諸神話と習合し信仰を獲得するなかで人間創造、天地開闢、文明教化をえて慈悲深さをもった救済の女神としての地位を確立する。

”大洪水によって伏羲女媧兄弟だけが生き残り、天意を伺った二柱は婚姻した”

この神話は女媧自らが婚姻制度を率先して完成させたものである。先史時代の母系社会は雑婚であり、親戚関係や婚姻関係はいっさいなかった。そのため女媧はふたたび人類が繁殖していけるよう婚姻制度を定め、それによって女媧は文明教化の相と人類に倫理と授けることとなった——。

知らない知識が流れんで、そのそばから僕は口から吐き出していた。激流のような知識と頭痛を堰き止めたころには焚火の薪の大半が炭へと変わっていたころだった。

靈視が降りたか。

僕のささやき声が聞こえていたらしいスミスが呟いた。

戸惑う僕に彼は労わるような声音で、さっきの現象を詳らかに教えてくれた。

霊視とはアカシックレコードと呼ばれる場所から知識を抜き出す技能だという。

神話や逸話にたびたび姿を現す、巫女や神官が使う超常的な力のひとつだそうだ。

決して凡人には使えないような力を前に、己の体は彼女のものへと変わってしまったのだなと一抹の寂しさを覚えた。

それに女媧のことだ。

汲み取った知識の女媧は、天変地異すら起こしてしまえる神様だった。それが僕らのまえに現れたというのなら、抗うのは不可能じゃないかと寒気をおぼえた。

まつろわぬ女媧は万全ではない。

僕の暗い表情になにかを悟ったのかスミスが少しだけ明るい声音で言った。まるでそこに活路があるというように。

どうやらまつろわぬ女媧が降臨する場所に、彼は居合わせていたらしい。神の降臨には必ずといつていいほど贄が必要となる。

スミスはそこを突いた。

降臨を邪魔されたまつろわぬ女媧は、贄を満足に得ることが叶わなかった。

だから現在のまつろわぬ女媧は万全ではなかった。

あるべき肉体が存在せず、精神のみで存在する、幽霊のような状態だという。

しかし万全ではないからこそ、完全を求めて贄を欲する怪物となっ
てしまった。

欠けている肉体を埋めるために僕らを？ 僕の問いをスミスは肯

定した。

だがひとつ問題があった。スミスは肯定とともに真実を語った。

実体をもたないまつろわぬ女媧に、——実体のある贄は、贄足りえないのだ。

つまり僕らが精神や無機物を摂取できないように、まつろわぬ女媧もまた肉体や有機物を摂取できない。そういった隔たりがあった。

……しかし女媧は不完全でも神。例外があった。スミスの少し躊躇いがちな言葉に、僕は気にしないで欲しいと促した。

その条件とは心のそこからささげたいと願ったとき。その時だけ、女媧は肉体と精神を一度に喰らうことができる。

つまり、あのとときの僕たち。

アマリリスは求められるまま総てを捧げようとして、僕はそんな彼女を見たくなくて、アマリリスと一緒に捧げものを差し出した。

僕たちは僕たちに捧げあったのに、結果的に女媧に捧げものを送る形になっていた。こんなバカな話があつていいのか。

アマリリスは捧げるだけの生に、幸せはあつたのだろうか。彼女の生に、なにか意味があつたのだろうか。

僕はフラちな考えをぬぐえずにいた。

アマリリスは女媧が求めたから現れた。そこにアマリリスの意思はなくて、ただ求められていたから。最後まで彼女に幸福だった時間を感じ取れなくて、僕のこころは沈んだ。

でも、彼女は、もとめられた。

まぶたを強くつむって、目をあけた。

ここってどこなんですか？ アマリリスへの思考を打ち切つて僕はまた問いかけた。

彼はすぐにはこたえず、指をならした。

すると驚くことに僕と彼のまえに火がおこった。その火は弱くなっていた焚火へ落ちていった。

橙に仮面をゆらす彼は、アメリカだ、とこたえた。

僕は目を丸くした。ふたつのことに。

まずアメリカという場所だ。

故郷の土地がどこだったか思い出せなかったけれど、アメリカという国は遠い国という覚えだけはあった。つまりここは故郷からかけはなれた場所で、僕はそんな場所へ喚び出されたのだ。

神のみがもつに相応しい強大な力を行使すればこそ可能な芸当だった。

スミスは【権能】と呼び、さつき彼が火をおこすのに使った【魔術】とは根本から異なる力なのだという。

権能は、神々やそれらと同格のものたちのみがあつかえるシロモノで、権能をつかえば地球のうらがわから人をよびだすも造作もなかった。

僕にとってはひどく縁遠いものだ。

魔術は、神に近づこうとした、あるいは、神を感じようとした人の努力の結晶で規模は小さいけれど、僕にもつかえるのだという。

霊視もその一種に入ると聞いて、僕は目をかがやかせた。魔術なんておとぎ話の絵空事が僕の手が届くところにあるというのだ。

こんな状況だというのにこころは浮き足だった。彼を質問せめにして、困らせたのをおぼえている。

そのときばかりは、過去も現状も、わすれることができた。

魔術とは端的に言えば世界や自分をダメすこと。それさえ出来れば大抵の事は可能らしい。

面白そうですね。

僕はここにきてはじめて笑った。

僕が笑うと、スミスもすこし安堵したようにみえた。……仮面の下

がどうなっているのか、わからなかったけれど。

スミスは気障つたらしい挙措で姿勢を正し、僕を見つめた。
なにはともあれ。君が無事でよかったアマリリス。

女媧に連れ去られたのは不運だったが、以前の人形だった君とは見
違えるほどの変化をしたのは、喜ぶべきかもしれないな。

——まるで人間のようだ。

喜ぶスミスのことばに、目の前が真っ暗になった。

6. 恋愛

僕は押し黙った。

そういえばアマリスとスミスは面識があった。経緯は僕の知るところではないけれど、彼は、アマリスとどこかで一緒にいて言葉も交わしたはずだった。

……あの、聞いてください。

僕は彼のバイザーの奥にある目を見据えた。

この身体が女性アマリスだったことを知っている人だ。

そんな彼にあの塔で起きた事を黙っているのは、あまりに不義理であつた。

君はきつと長い間、あの牢獄に押し込められていて混乱しているのだろう……。私はもつと早く君のもとへ来るべきだった。

最初スミスは僕とアマリスとの過去を信じようとしなかった。

僕自身、過去の記憶が曖昧で説得力がかけてしまったのもあつた。だからだろう、別人格を形成してしまうほど追い詰められた、そう考えたスミスは悔いるように拳を固め、彼の言葉に僕も弁明に必死になつた。

ち、ちがいますっ！ その証拠にほら、コツチもちゃんと付いてますし！

男同士だからと僕はズボンに手を掛けて、彼に腕づくで止められた。

い、いや、わかつた。わかつたから少し落ち着きたまえ。

瀟洒な姿勢を崩さなかつた彼がこればかりは動揺していて、僕としても顔から火が吹きそうだった。

何度目かの説明で、スミスはやつと信じてくれた。

……重ねて、すまなかつた。

話終えると彼は3度目の謝意を口にした。もう余裕の含まれていないのが表情を見なくてもわかるほど苦り切った声だった。

僕は否定も肯定もせず、ただ夜風に揺れる橙を見つめていた。

私はアマリリスと旅をしていた。一緒にいた君も分かるのではないか？　彼女がどんな存在だったか。

頷く。

アマリリスの異質さはよく知っていた。

アマリリスはすべてを捧げてしまう人でした。命を削ってもかまわずに。

君はアマリリスを人と呼ぶのだな……。

アマリリスは望みを汲み取って叶えようとする性質をもった存在だった。人形と変わらない無垢な彼女に善悪などなく、手当たり次第にな。

人形って……アマリリスは歴とした人間でした。少し変わってたけど、僕を助けてくれた人間でした。

アマリリスは人形じみていた。

でも人形と断言されるのは納得いかなかった。

いいや彼女は人形だ……だったと言うべきかな。

それでもスミスは翻さなかった。

だから私はアマリリスに感情を植え付けようとした。人格を形成すれば力の制御もある程度可能だろうと踏んでね。

春から夏への数ヶ月。私とアマリリスは旅をして、国々を周り、人々と触れ合わせ、人間と同じように扱った。

スミスの語る言葉の端々に彼とアマリリスの共有した過去を思わせて、在りし日をのぞいた気分になった。僕は最初、スミスはアマリリスに冷たい感情ばかりを向けているかと思っていた、でも今ではわからなくなった。

アマリリスは私にとって……いや。アキくん、と言ったな。女媧は君を”ホウギ”と呼んだ、そう言っていたね？

過去を振り返るのを止めた彼は、人が変わったようだった。

仮面の奥には強かさと怜悧さを兼ね備えた光があった。

戦士の目だった。

ホウギ。

微かに認識できたまつろわぬ女媧の眩き。でも確かに女媧の口から出た言葉だった。

僕が頷くとスミスは得心したように腕を組んだ。

なにか分かったのだろうか、と不思議がる僕にスミスはすぐに気づいた。

前提として女媧は不完全な存在だ。スミスの言葉に”万全ではない”ときつきもスミスが言っていたことを思い出した。

でも女媧の完全な姿って、いったい何なんですか？ 単純に肉体をとり戻しただけでいいんですか？ 僕はさらに問い返した。

そうだな、身体をとり戻しただけでは女媧は完全へとは至れないだろう。

……ここからは私の推論となるが、中国において女媧は現代に至るまでメジャーな神だ。そして遺跡などから発掘された絵図に描かれる女媧は、兄弟にして夫たる【伏羲】と絡み合う姿で描かれることが多い。

そして伏羲は、庖羲ほうぎという名ももっている。まつろわぬ女媧のいうホウギとはこの神を指していると考えて間違いないだろう。

伏羲。それがまつろわぬ女媧の言葉の正体だった。

でも、なんで僕を伏羲だなんて？ 僕はただの人間ですよ……いまはちよつと違いますけど。

女媧という神の神話の枠組みは【道教】だ。そして道教の思想に【陰陽太極図】があるのを知っているかな？

えつと……魚みみたいな形をした絵でしたっけ。

そうだ、この図が示すのは対となる二つの要素の関係性だ。陽がどれほど強くなっても陽の中に陰はあり、いつかは逆転しうることを示

している。

これを女媧に当てはめると、女神である女媧は“陰”の相をもつことになる。そして対であり男神である伏羲は“陽”の相をもつ。

女媧のなかに伏羲はあつて、伏羲のなかに女媧あり。

伏羲を内包した【陰陽一体】こそ完全なる女媧の姿なのだ。

僕はふと気づいた。まつろわぬ女媧は不完全で、幽霊のような存在だった。まるで影のようで、温かいものがなにもなかった。

……つまり、伏羲を求めているまつろわぬ女媧には陽の相がない？

おそらくな。私がまつろわぬ女媧の降臨に介入した影響だろう。

理屈は……なんとなく分かりました。でも、なぜ僕を？

ミスは僕に視線をよこそうとはしなかった。ただポツリとつぶやくように推論を語るのみだった。

両性具有は神話において大きな意味をもつ。

そもそも奇形とは信仰の対象になりやすいものだ。ましてや二つの性を備えた両性具有は古代では精霊にも等しい存在だったと考えられている、完全な存在として信仰をあつめたほどに。

自覚は薄いだろうが君は“君”であるだけで“完全性”という神性を持つてしまっているんだ。

僕に何度目かの衝撃がおそった。

君はまつろわぬ女媧によって両性具有になり完全性を得た。

陽と完全性の獲得だ。

それは女媧にとって喉から手が出るほど欲しいもので、おそらくまつろわぬ女媧は君を伏羲に見たて、交わる事で復活を果たそうとしたんだ。

絶句した。まつろわぬ女媧の悪辣さと狡猾さに。

あんな、知恵なんてなさそうな化け物なのに……。

スミスの説明に僕は唇をかみしめた。知性を感じさせない女媧は神というより妖怪じみていて、しかし僕らを苦しめることには悪魔じみた狡猾さを持っていた。

神とは、理性を失っていようと、神なのだ。

スミスはどこか慣れ切ったような口ぶりだった。

話を戻そう。

これは大前提となるが君は決して女媧に？まれてはいけない。君と女媧が交わったが最後、単体から複数を生み出す究極の一が誕生するとみて間違いない。

道教には”陰陽の結合により万物を生じる”という思想がある。ならば創成神としての権能を取り戻すのは必然だろう。

創成神？

ああ。女媧と伏羲が絡み合うすがたで描かれる絵の多くは、コンパス規と典矩をもっている。これは創世神としての表れなのだ。

なんて壮大な話だ。

僕は正直なところ全く現実味がなくて、話の理解も周回遅れどころか置いてけぼりだった。

でもわかったことがある。僕はまつろわぬ女媧の餌食になってはいけない、それだけは死守しなければならなかった。

ふと、大きな眠気がまぶたにのしかかった。”夜”の睡魔ではない。馴染み深い疲労によるごく普通の眠気。

今は眠るといい……君が目覚めたらここを発つ。

彼の心地よいテノールを耳にしながら、僕のいしきはそらへ落ちていった。

7. 戦車

僕たちはあつけなくカミサマに襲われた。

ここはまつろわぬ女媧の庭。逃げだした僕らをさがしだすことなんて、女媧にとっては赤子の手をひねるようなものだった。

十分な睡眠をとる間もなく、強襲され戦闘を強いられた。

おどろおどろしい気配に吞まれ、へたり込むしかなかった僕。けれど彼は違った。スミスは前に出て、漆黒の【魔鳥】へと変化し、雄々しく舞いあがった。

驚愕する僕をよそに、彼は女媧と互角に渡り合っていた。女媧に対抗できる鉾をもっていた。

夜闇を舞台にした戦場で、濃淡の分かれた黒と黒の潰し合いがはじまった。

女媧は影となって踊り狂う。スミスはさまざまに姿をかえて夜を舞う。

ジョン・ブルート・スミスと女媧のたたかいは凄まじい、その一言に集約された。そして彼らの戦い方は捉えどころがないという点においては似通っていた。

僕には陰翳を題材にしたひとつの演目じみて、あれが命の奪い合いなのだど気づくのに時間がかかった。

呆けたまま空を凝視し、思う。

スミスは女媧をホンモノの神と言った。なら、神すら戦える彼は何者なのだろう、と。

怪鳥の姿を解いた彼が月光をおもわせる銀の弾丸を放つと、弾丸が一直線に伸びて黒影を穿った。だが黒影は嘲笑うようにいなしきる。

しかし一条の光弾は世界を照らし出して、女媧の姿を白日のもとにさらけ出した。女媧の全容が明らかになる。

ひっ。

僕は喉奥から引つ掻いた嗚咽をもらした。

半人半蛇の女妖。一言にすればそんな姿で、その面貌は荒れ果てた

蓬髪の黒髪によって見通せなかった。

ただただ長い髪の隙間からのぞく眼光が、恐ろしかった。ギチギチと昆虫じみた声を鳴らし、女媧が躍動した。それは攻守が入れ替わる合図。女媧はスミスの喉元へながい腕を伸ばし、女媧に追われた彼が世界から姿を消す。

虚と実が移り変わる戦いのなかで、僕のなにかが弾け続けた。

スミスが銀の銃弾を放つ。——アルテミス。

毒手を漆黒の魔鳥となっていない。——テスカトリポカ。

魔鳥が岩を、木々を、すり抜けて陰翳が揺らめく。——ビフロンス。

スミスが力を振るう度に、霊視が降りているのだ。同時に霊視が囁く。さっきの見知らぬ単語群が、神にすら抗じる力の源なのだ。

霊視の助けもあつたけれど超越者同士の戦いを、薄ぼんやりと理解できていた。常人には到底不可能な事。

心当たりがあるとすれば、きつと僕は望まずして彼女の肉体を得た。つまり彼女の瞳が、彼女の耳が、彼女の五感が、僕だった。

これはアマリスが見ていた世界なのだ。だから凡そ人智から外れた戦いを認識できて、うっすらとだが理解も出来ている。

もう僕という残り香は跡形もなく消えてしまっていた。

人間の動体視力と空間把握力では到底追えない戦いのなかで、スミスがアクションを起こした。それは女媧へのものでは無かった。

ほんの刹那、指をふるだけのサイン。……でも僕に向けられたものだった。

以心伝心には程遠い僕らだったけど、彼の意を察して走り出した。なんのことはない。

——逃げろ。

きつとぞう言っていた。

8. 剛毅

サインは大きな隙だった。

隙をきつかけにまつろわぬ女媧としてのぎを削っていたスミスは一撃を許してしまった。

それは吹き矢じみた影の一滴で、銃弾と同速の影矢はスミスの仮面に取りついた。けれど時間にすれば指を弾くくらい短い時間で、彼はすぐに火となつて実体を消失させて影の一滴だけが闇にとけた。

スミスという壁がなくなり、フリーハンドになった女媧は首をぐるりと180°回転させると僕に狙いを定めた。異形の叫びがこだまする。影が濁った。

耳を抑えて、とにかく足を動かした。

スミスの推測に間違いはなかった……まつろわぬ女媧は僕を喉から手が出るほど欲している。

その証拠に僕が一目散に逃げだせば過剰なまでに反応し、追いかけて来た。背に堆積していく妄執の塵に震えが止まらなかった。

いまの僕は人間から大きく遠ざかった身体をもっていて、世界チャンピオンだつて目じやないほど早いスピードで駆けていた。

でも懸命に走る僕に女媧はまたたく間に追いついて、手を伸ばした。影は波に見えた。波打ち際に打ちよせる海水さながらに濃淡があつて、巨人の手のひらにつかみ取られる錯覚に陥った。

僕は走った。

どこまでも。

アマリリスの肉体はヒトだった僕よりはるかに高性能で、足も早くて息が切れる事すらなかったけれど——鼓膜を苛む、叫び。叫び。叫び。

心から活力を霧散させる絶叫が、僕の心を痛めつけた。

まるで黄泉の比良坂で逃げ出したイザナギの追体験をしている気分陥って、女媧が本来人を作った慈悲深い女神だという伝承が信じられなかった。我執に囚われた荒ぶる邪神が、今の女媧を形容するのにふさわしいと思えた。

背筋とわき腹に温度のない冷たい指が這った。それを皮切りにま
つろわぬ女媧に貪られていたあの暗澹たる記憶が思考と接結し、絶望
がこころを埋めた。

恐ろしい。

怖ろしい。

畏ろしい。

けれど恐怖は生き残るための燃料でもあった。

追いつかれるっ。

僕が最期の抵抗とばかりに地を蹴って身を投げたした時、爛々と輝
くエメラルドの双眼が視界を駆け去った。反射的に目で追うと、僕と
すれ違うように虚空から影色の【豹】が疾走し、女媧の喉元へ喰らい
つていた。

すぐに気づいた。あれはスミスだった。

スミスは豹の猛々しい牙でまつろわぬ女媧へ喰らいつき、怒濤の咆
哮をあげた。同時に世界が白み始めた。

暁だ。夜が明ける。

塔に閉じ込められてから明けることなのなかった常夜の世界が晴
れていく。領域の主である女媧が傷つけられたからだ。

スミスたちから視線を外し、前を見据えた僕は、森のはるか先に一
条の光を見た。

あの先に辿りつければこの森を抜けられる。女媧の領域から抜け
出せる。

確信が心に踊った。

僕は、行くんだ！

僕は全身に残った力を臍下丹田の源泉から掻き集めて、一步を踏み
だし——直後、まつろわぬ女媧による靈視がたたきつけられた。

9. 隠者

そこは大学の研究室を思わせる一室だった。整理されてはいるものの本棚や机には随分な量の学術書の数々が並び、部屋の随所には素人目では見当もつかない薬品や標本の入ったビーカーやシャーレ……碩学泰斗の居城に相応しい知が敷き詰められた場所だった。

部屋が知の塊ならば、部屋の最奥に座る黒い肌をもった老人もまた、部屋の主に相応しい見識をもった御仁なのだろう。

彼の名をジョー・ベスト。

欧州において並ぶ者がいないとすら言われる妖精博士だ。フェアリードクターそしてその肩書きに違わず、深い見識とともに世界の裏側をよく知る人物であつた。

”近頃米国を騒がせている奇異な事件。流浪者が一夜にして突然巨万の富を手に入れたり、シャーマンが持つようなプレコグニション、クレヤボヤンスといった人にはあり得ない力が備わったり、人気スターが原因不明の災難が訪れる……：そういつた無秩序で、超常現象の類であり我々の領分であるならみ真相を探っていた事件のことを覚えていかな、ジョン？”

ジョーは誰かへ語りかけていた。そしてこの一室にはジョーのほかにも人影があつた。

ただ、その恰好は普通とは口が裂けても言えないほど奇抜な格好だった。黒い仮面に、肩から羽織った長いケープ。気取った口調に雰囲気と相まって創作のなかから現れたような怪人じみた人物だった。

彼の名はジョン・プルート・スミス。対面に座るジョー・ベストの友人にして、彼が支援する”王”である。

”それはジョークにしては些か侮りが過ぎるではないかな、ジョー？ その件に関しては私も骨を砕いているし、最近では密かな楽しみである晩酌の機会すら奪われているありさまさ。そして真相はいまだ闇の中だ、その認識は君と共通するものだと思っていたが？”

どこか迂遠な云い回しの仮面の男に、ジョーは得意げにほほ笑んだ。

” そうだな、君の言う通りさ。けれど遅々とした進展しかなかったこの事件、ついにその真相がわかったよ”

” ふむ。それは君の隣にいる彼女に関係のある話なのかな、ジョー?”

この空間にいる最後の人物へスポットライトが当てられた。それは一人の緋色の髪をもった少女だった。

生の気配がひどく希薄な彼女はこの部屋につれられてからずっと一切の感情を表さない無味乾燥とした表情のまま、ただ、ジツとスミスを見つめていた。

” あの件に関するあらゆる事件を精査した結果、わかったことだ。件の不可解な事件すべてに、この少女と接触した形跡があったのだ。そして私が彼女を見つけ出し、彼女を保護することに成功したのは今朝のことさ”

” ……ふむ。たしかに彼女は人間ではなく” 神に連なる者” のようだ。私の神殺しとしての身体が臨戦態勢に入っている。もしや彼女は以前矛を交えたアーシエラと同じ存在なのかな?”

” 当たらずとも遠からず、といった所かな。彼女は” 神祖” や神の眷属たる” 神獣” と一線を画していてね、彼女は神によって創造されたんだ。それも神の一部を使ってね。いうなれば神の分身か神の子と呼んでもいいかもしれないな。

そして創造した神の神性に従うように彼女は欲しいものを欲するままに与える性質をもってしまったている。より詳しくいうならば、交流するうちに人の深層心理のなかで求める、一番の欲求を暴き出してそれを叶えるんだ”

” 神の一部、か…私の身体が臨戦態勢に入ったのはそのためか。しかしにわかには信じがたいな。これまでの事件に小さなものはなかったはずだが…それほどの力だ。対価はあるのだろうか?”

” それが驚くことに対価はない。人がただ願うだけ、それだけで無造作に願いを叶えてしまう。それが望もうとのぞまざろうとね”

” ……願望器、という訳か”

” ああ。今は呪詛によって縛っているがそれも何時までもつか分

からない。それにこれまでの彼女の行いによって人以上の力を得た者もいる、異形の姿になった者もいる。

願いが叶うことは必ずしも幸運なことではない。そして彼女自身、力の塊だ。例えるなら使い手次第で武器にも凶器にも盾にもなる銃。だが放置すれば《蠅の王》の二の舞だ、神の降臨すら視野に入る第二のロスの危機が訪れるだろう”

ジョーは改めてスマスを見据えた。

”この危機、是非ロスの守護者にして王たる君に解決してもらいたいのだ”

”うむ。それに否はない”

ジョンは安請け合いだといわれても仕方がないほど、しかし、気負いなく了承した。王の決定を受けてなお、ジョーの表情は硬質なままだった。ジョンも訝しんだが、自分の疑問をぶつけることを優先した。

”しかし方法はあるのかな？ この少女が無害となり、且つ、これまで起こした奇跡を消す都合のいい方法が”

”これは驚くべきことだが、ある、と断言しよう。先ほど私は彼女の力に対価はないと言ったが、それらの力の悉くはまだ彼女と強く結びついているんだ。まるで電力を常に流しつづける電線のようにね。”

そこでスマスは訝しげな表情でオトガイに手を当てた。

”それはおかしな話だ。現に彼女は力を使い、人々も力を使っている。魔力や神力も使ってなくならないほど万能ではない。そこへ入り込む余地はないのではないかな”

”うむ。力の行使には対価は必要、これは絶対の法則だ。そこで私はひとつの仮説を立てた。もしかすると彼女や人々はそもそも力を使っていないのではないか、とね。

”力を使っていない……?”

”そうだ。それは彼女がもつ性質に秘密がある。

彼女は”すべてを捧げる者”であると同時に”すべてを捧げられた者”という裏の顔ももっているのさ、ちやうど君たち神殺しの義母

殿のようにね。神に連なる者の多くは表の顔と裏の顔をもつものだ……実りをもたらす大地母神が、死を司る冥府の神だったというのはよくある話だろう。

いまは捧げる者としての相が強いが、捧げられる者としての相が強まれば、今までの彼女が使用した力はすべて回収できるのではないか……と私は考えている”

”つまり、願いとは彼女の力から与えられた訳ではなく、彼女によつて貸し与えられている?”

”言い得て妙だな。そしてここに私たちの事件解決の糸口はある。もしかすれば貸し与えたその全てが彼女に返されたならば、きつと彼らはもとに戻るのではないか、……とね”

”ふむ、理屈は分かった。ならば私の役目とは?”

”ああ、それだが私が考えた彼女を止める方法は三つある。一つは力の源である彼女を殺すこと、彼女を殺せば貸し与えている力もそのまま消えてなくなるだろう。

”論外だな”

”ああ、それに不確定要素が多すぎる。

では2つ目だが、これは前者に比べれば時間はかかるが堅実で現実的だ。彼女自身が願いに善悪を付けられるほどの倫理観を植え付けること。そしてそのあと彼女の意思で力を回収する”

”……”

”長期的であり、人間のみなら神魔からも付け狙われることになる困難なミッションとなるだろう。君は魔王であるが、常識を備えた守護者でもある。ほかの同格の王たちには決して頼めない。どうか神災であり無意識の人災であるこの超常現象から、我らを守って欲しい”

大変なミッションとなるはずだった。人に近づけ過ぎても無作為に願いを叶える存在と行動をとものにせねばならず、その上で人間社会での善悪や倫理観を植え付けろというのだ。ましてや力の塊である少女は神々ですら欲しがらぬ無色の神具にも等しい。

まつろわぬ神に付け狙われることは容易に想像できた。ああ、たし

かに王である彼にしか成しえないミッションだった。

”頼まれようジョー！”

”ありがとうジョー”

ここでジョーははじめて安堵したように顔を綻ばせ、机の引き出しからひとつのシャーレを取り出した。なかには乳白色の小石が入っており、魔術的な保護をになつていた封を取り払うと、これまで無関心を貫いていた少女が明らかな反応を示した。スミスもまた感心したようにうなづいた。

”なるほど。【天使の骸】か”

天使の骸。

聖遺物ともよばれるそれは簡潔に言えば神の遺体だ。神々が地上から去るとき、時たまその遺骸がなんらかの形となつて遺される事があるのだ。そしてその多くが少なくない力を秘めていた……滅んだ神の神性もまた。

”ああ。中国で発見されたこの天使の骸は、創造神であり地母神に由来する逸品だ。彼女を生み出し、彼女もまた、それらに連なるものならば一石を投じることになるだろう”

それにかの女神は慈悲深さももっていてね、きっと彼女の助けになるはずだ”

ジョーは気障つたらしい主を做うような茶目つ気に溢れたワインクを飛ばした。

”はは、それはいい。私と彼女のミッションの間、御守り代わりに持つておくでしょう。ああ、そうだジョー、そういえば君の言っていた彼女を止める最後の方法とはいったい何だったんだ?”

”荒唐無稽なものさ。……どんな経緯でもいい。誰かが彼女のために捧げたいと願ひ、彼女もまた誰かに捧げたいと彼女自身が願つたとき。その時、彼女の力はすべてその誰かへ移譲されることになるだろう。つまり万民に奉仕せよと望まれた彼女がだれか一人を選び出すんだ”

”それは……”

” ああ、おそらく最高難易度だろう。なにせ願望器である彼女のアイデンティティを捻じ曲げることに等しいからな”

ジョンと少女の旅はこうして始まった。

スミスは、まず名前を与えた。アマリリス、と。

旅をはじめた季節は春で少女と歩いていた道端に偶然アマリリスの花が咲いていたから、理由はそれだけだった。

旅のなかでスミスはアマリリスへ言葉の使い方や意味、ナイフやフォークの持ち方、人並みの常識を植え付けていった。

アマリリスはもともとしゃべることができて、人の営みのなかに紛れることはできた。

けれどありがとうやおはようの意味も、人がなぜ願いを叶えたいのかも、自分がなぜ願いを叶えようとするのかも、知らなかった。

スミスは根気強くアマリリスと接した。

その姿はヘレン・ケラーを導くアン・サリヴァンさながらで、そのおかげかアマリリスは夏になるころには見違えるほど人間らしさを備えるようになった。

しかし順調だった彼らの旅も暗転する。

それまで天使の骸はスミスが持っていた。件の天使の骸はアマリリスとは相性が良い……いや、良すぎる代物であり、彼女が触れればどのような化学変化が起きるか全くの未知だったからだ。

そして事件は起こった。

理由はなんのことはない。ただスミスがふとした拍子に天使の骸を落とし、アマリリスがそれを拾った。

言葉にすればそれだけで、けれどそれが災厄の始まりだった。

——まつろわぬ女媧 降臨——

突然だが神の人為的な招聘には、三要素が必須となる。

招聘する神を由来とする触媒と、神を求める狂氣的な司祭、そして贄たる巫女だ。

ほかにも様々な要素は存在するが、最も重要なものはこの三つで、奇しくもこの場にはすべてが揃っていた。

触媒は天使の骸。

司祭と巫女を兼ねるのはアマリス。

……天使の骸とはつまり遺体のこと。死に際というものは得てして強烈な意志を発しやすいものだ。それがまつろわぬ神などという意志の化け物ならば尚更だ。

天使の骸にはおびただしいほどの生への妄執が刻まれていたと推測していいだろう。そこへ本人すら自覚しない深層意識の願いさえ汲み取る、「すべてを捧げよ」と神に定められた無垢な少女が現れ、触れ合えばどうなるか。

その時起きた現実こそが答えだった。

スミスが事態を察知したとき、アマリスは体の一部である羽根をもがれていて、すぐ傍でまつろわぬ女媧が産声をあげていた。

スミスは激怒した。

普段冷静沈着な彼からは想像もつかないほどに。まるで子を奪われた鬼子母神のごとくその怒りは苛烈であった。

”我が大業を数えあげよう——ッ！”

咆哮じみた権能の言霊が唄された。

ジョン・プルート・スミスは常に冷静さをもった魔王であった。そしてそれに倣うように彼自身のバトルスタイルも冷徹なものだった。平常心を失ったスミスは普段通りの戦いやパフォーマンスができるだろうか。

答えは、否だ。

まつろわぬ女媧は実体のない精神体であることを最大限に活用し、スミスをさらに煽った。最後はスミスをあざ笑うかのようにアマリスを己が影へ取り込むと、霞のごとく姿を消した。

スミスの完敗であった。

その後、彼はアマリリスとまつろわぬ女媧の搜索を開始し、アマリリスは女媧によって造られた塔へ幽閉されてしまった。

——そこまで来ると過去の記録は、僕の記憶と繋がった。

僕はいままで霊視という形で過去を見ていたんだ。

つまり、僕たちを苦しめる原因を作ったのはスミスで……——でも主人公は、スミスだった。

10. 運命

アキである僕はスミスとアマリリス、彼らの物語において主人公でも、道化でもなく、モブキャラですらない、ただの部外者だった。

スミスはスミスであるだけでよかった。その精神性と力に背負った運命。それだけで主人公足りえ、すべてが彼のドラマのひとつになった。

アマリリスは求められていた、求められるだけの理由があつたから。そもそもが神に連なる者であり、元々の贄であつたアマリリスでなければならなかつた。

なら、僕は？

僕のポジションが、僕である必要はあつたのだろうか？

そんなの深く考えるまでもない。まつろわぬ女媧がアマリリスを逃さないための枷として、あるいは、アマリリスを両性具有とするための素材として、僕は有象無象のなから抜き取られた。

僕の役目はだれでもよく、だれかである必要もない。僕という役に固有名詞が宛てられることはなく、誰でもない、何者でもない、”僕^{アキ}”であり”空^キ”でしかなかつた。

主役はスミス。女優はアマリリス。敵役は女媧。

僕はこの神と神殺しの繰り広げる演劇の舞台道具のひとつだつた。まつろわぬ女媧が求めていたのは僕の男^陽のいう要素だけ。だからこそ代えがきいて、ありふれた、使い捨ての道具にすぎない。

えらばれたわけでも、もとめられたわけでもない。

打ちひしがれるのは何度目だつたか、もうおぼえていなかった。

膝を抱えて何も無い霧がかつた虚空を見つめつづけた。

のぞき見た過去と僕がたどつた体験を照らし合わせ、あらためてまつろわぬ女媧の悪辣さを悟つた。

吊り橋効果、というものがある。不安や恐怖を強く感じる場所に出

会った人に対し、恋愛感情を抱きやすくなる現象だ。

僕が陥った状況はそれによく当てはまった。

ドツボにはまった僕は極限状態のなかでアマリスにすがって、すがられることを求めた。依存は愛するという行為に酷似していて、愛することは捧げる行為そのものだった。それが美しい少女ならなおさらだった。

思考を、時間を、肉体を、誰かのために費やすことは捧げることと何も変わらない。そして己を他人に捧げるという行為は、糧となり同化していく事と同義だ。少なくとも女媧にとってはそうだった。

神話上の女媧は、神々や人々のなかで最初に結婚し、婚姻という制度を定めた神だ。つまり婚姻を定める神であり、男女を結ぶ権能をもっているということだ。

僕がとおいアメリカに喚び出された権能はきつとそれだったに違いない。そして女媧という仲人の見守るなか僕ら愛しあひ……そうして僕たちは最後には一つになった。

僕の身体と彼女の意志を食いつぶし、結び合わせて。

なんて反吐が出る話だろうか。

思えばアマリスと配合させる男は、凡夫であれば凡夫であるほど都合がよかったのだろう。普通の倫理観をもった人ならば、きつとアマリスを助けようとするに違いない。現に僕がそうだった。

だけど何の変哲もなく特別な能力のひとつも持たないから、まつろわぬ女媧の牢獄から助けられることは決してない。

その上、アマリスを助けようとするひたむきさと無力さがすべてを捧げようとする彼女を縛る枷となるのだ。

万が一、アマリス一人だけ逃がす手段を見つけてもアマリスが逃げることはない。逃がそうと尽力してくれた者を見捨てることできない。

それが逃げてくれという願いでも聞くことはないのだろう。

願望器であるアマリス。けれどそこに自分は勘定に入っていない、そんなものを計算に入れてしまえば己の力を使った自傷にも等し

い願いを叶えるという行為を否定してしまうから。

必然、逃げ出すために必要な労力は2人分となり脱出の難易度は跳ね上がり、凡人には到底不可能となる。

誰でもよかった。凡人。代えが利く……。

僕の周りを言葉が飛び回って、いやでも目について、頭から離れようとしなかった。心が萎えていくのを止められなかった。

だから僕は過去を求めた。

自分の過去を取り戻して、何者であったか知ることができれば、この繋がれた見えない鎖から逃れられると信じて。

僕がアマリリスと出会う以前の自分を懸命に探った。ここはきつと心の奥底のどこかで、僕の過去があるに違いなかった。念じれば、意思に呼応して辺りのもやが晴れていく。

もやが晴れた先、そこは空洞だった。

ぼつかりと何も無い”無”だけがわだかまっていた。

これが、僕の根源……？ 僕は思わず後ずさって顔に手を当てた。すぐに違和感を覚えた。

ぺたぺたと鼻、口、目、耳を探って、でも手のひらになにかが触れる感覚はどこにもなくて、そして疑問にぶち当たった。

——僕の顔はどんな顔だった？

自分の顔なんて当たり前でありふれているはずなのに、今の僕には見当もつかない難問におもえて、禅問答のように答えが遠いもの思えて仕方がなかった。

疑問と恐怖をおぼえたその時、水の音が耳朶を打った。

僕は音のした方へそろりそろりと歩いて行って、小さな水溜まり見つけた。

水はどこか高いところから雨のように落ちてきて波紋を作りだした。僕を身がかがめて許しを乞うように頭を下げた。水鏡に僕の顔が映り込む。

——僕の顔は、空洞だった。

絶叫とともに目を醒ました。

11. 正義

瞼にあたる光を感じて僕の意識は目覚めた。

どうやら鬱蒼と茂る森のなかに寝かされているらしかった。風に揺れる木々から差しこむ木もれ日、ちらちらと僕を照らしていた。夜は晴れていた。

寝起きは最悪だった。でも乱れる呼吸とひどい寝汗が僕の意識をクリアなものへと変えていった。

あたりを見渡したけれどスミスの姿はなかった。

正直助かった、考えをまとめるのには丁度いい。

あれからどうなったのだろうか？ 意識がクリアになっていくにつれ記憶も鮮明になって、最後にまつろわぬ女媧と戦っていた事を思い出した。

でも僕が安全な場所にいる。

あの状況からスミスは僕を連れて逃走に成功したという何よりの証拠だった。もしかしたら女媧を討滅している可能性もあった。

完璧だ。素直にそう思う。

女媧にしてやられた経緯はあれど、僕を助け出した辣腕とまつろわぬ女媧を退けた強さは鬼神にも思えるほどでこれ以上なく頼りがいがあった。

思えばスミスはアマリリスを失ってしまったけれど、女媧の完全なる復活は防いでいたし僕を助け出すことにも成功していた。

被害をみれば僕らだけに収まっている。しでかした分の帳尻合わせは全体を見れば取っている、といってもよかった。

そもそも不安要素がそこら中に隠れ潜んでいる困難なミッションだったのだ。これくらいのは過失はあつて当然だったのだ。

だったら僕も惜しまず彼に協力しなければいけない。もし女媧が倒されていないかったら打倒は望むところだし、女媧が倒されていれば宛もない僕だ、彼の元で働くのが道理だろうと思えた。

草木が擦れる音と足音がきこえた。

彼が戻ってきた。

枝葉をかき分けて姿を見せたスミスの手には食べられそうな果物や簡易的な水筒が握られていて、倒れてしまった僕のために取ってきてくれたのだろうと察することは簡単だった。

起きたか、身体は大丈夫か。僕が目覚めていることに気づいたスミスはどこか安堵した様子をみせて労りの言葉すらかけてくれた。

あの女媧と闘いながら、その上で僕を助けてここまで逃げ切つて。どこまでも隙がなく、完璧な彼に助けられたのが誇らしい。

スミスが僕のそばの寄って膝をついた。

起き上がっていた僕に横になつていなさいと言葉をかけ、肩に触れようとした。

スミスには感謝してもしきれなかった。なら僕も応えるために感謝を――

――さ、触るなっ！

パシン、と乾いた音が僕らの間に生まれた。

頭の冷静な部分とは裏腹に、喉から飛び出た言葉は罵倒だった。そして罵倒が僕の封じ込めていた感情に火をつけた。

言霊には力がある、それは本当だったみたいだ。頭の冷静な部分がそんな思考を残して、あとの僕はぐちゃぐちゃになった。

あ、あなただったんですね……！

これまでの自分を覆すほど底冷えした声だった。

あなたがアマリスと僕を苦しめた元凶だったんだ……。

まつろわぬ女媧に観せられた霊視でアマリスとあなたの過去のを知ることができた……あなたが女媧を喚んだんじゃないか！

彼への正の感情でつくった張りぼての殻は綺麗さっぱりなくなつていて、腹の底に渦巻いていた負が僕を支配した。

あなたがもつと大雑把じゃなければ！

あなたがもう少し適当じゃなかったなら！

こんなことにはならなかった筈だ！

彼女が傷つくいて死んでいくことも、僕が呼び出されて苦痛を味わうこともなかった！

——すべてあなたのせいだっ！

怨嗟を乗せて、僕は糾弾した。自分の思いの丈も吐き出したし、真実でもあった。でもそれらを取り払って最後に残るのは一つの醜い感情。

嫉妬だった。

失敗しようともその帳尻を合わせる辣腕。瀟洒で確固とした自我。強力無比な力。

全てが僕にとって縁遠い宝ばかりで、強烈な嫉妬が喉から心臓を薪とするかのように燃え上がらせてはザワつかせた。

僕は自分の無力さに目をそらして、圧倒的なるかな高みにある太陽に手を伸ばしてしまふ、イカロスよりも救えないどうしようもない凡俗だった。

僕が糾弾する間、スミスは反論することもなく肅々と受け入れていた。

そして僕の言葉が途切れると、スミスがゆらりと動いた。

ひっ、と悲鳴が僕のものから漏れた。でもスミスに害意はなくて、彼はただ持つてきた食料と水を僕のそばに置いただけだった。

君は疲れているんだ。最初と変わりない労りの声。

残念ながらまつろわぬ女媧は倒しきれていない。明日もまた辛い日になるだろう……今日は休んでいたまえ。

そう言い残してスミスは姿を消した。

僕はスミスを見ることすらしなかった。

ただ、どこかで遠くで獣の悲しげな遠吠えを聞いた気がした。

12. 刑死者

もう一度目覚めたとき、スミスはまだ戻ってきていなかった。

どれだけ待っても姿を見せない彼に不安になって探しに出たけれど、結局見つからなかった。

一日がすぎて陽がかたむきかけた頃、中天に光芒が瞬いた。

その眩い光弾は自由自在に空を駆け巡って、僕はすぐにその正体を見抜いた。あれはスミスの弾丸。神と闘えるほどの戦士である彼を象徴するアルテミスの権能だった。

彼がなぜいないのか、彼がなにをしているのか、全てを悟った。

僕は色を失いながら立ち上がって光の方向へ駆け出した。同時に自責の念に襲われた。過去をふり返ると、僕らのために尽力してくれた彼の手を振り払って、今度は命をかけた戦いに駆りだしてしまった愚かな自分を見つけた。

気を抜けば吐しゃ物をもらしてえずいてしまいそうな罪悪感のしかかって押し潰されそうだった。

走って、走って。

駆けて、駆けて。

戦場へたどり着いた。戦況はひと目で分かった……スミスは劣勢だった。

あのいつも冷静なはずのスミスが精細を欠いている。

僕は彼らの戦いを以前とは違ってつまびらかに見通すことができた。霊視による気絶が契機だったのか、ところどころが曖昧だった前回とは違い、見違えるほど戦いはクリアで高高度な情報がいとまたやすく理解できていた。

けれどそれは福音ではなかった。

あの超然としたスミスが追い詰められている、それをまざまざと感じ取ってしまったのだから。

超越者同士の決着は早かったように思えた。

まつろわぬ女媧による攻撃によって、スミスは壊れた人形のごとく項垂れた。外傷は見受けられず、血の一滴も零していないのに、全身の血が凝固したように彼から生気が消滅していた。

影から這い出たまつろわぬ女媧が仕留めた獲物へそろりと手を伸ばす。

ガア……………ア……………！

スミスの苦悶の声が虚空に響いて、力なく溶けていった。あれはとどめを刺しているのではなく、辱めているのだ。

まつろわぬ女媧にこれ以上の追撃は必要ないはずだった。それにアマリスや僕のように心を折っても贄にならないスミスに用はないはずだった。

女媧は神である。しかし戦士や英雄ではなかった。倒した敵を苦しめないように介錯する、そんな概念は持ち合わせていなかった……ただ己を苦しめた怨敵に鬱憤を晴らしているだけだった。

その様子を、僕は見ていた。

時間が流れてスミスが声をあげる度に罪悪感と恐怖、強迫観念がいつぺんに押し寄せて精神は摩耗し息が荒くなった。

苛まれた心は徐々に余裕がなくなつて、意識を曖昧にし、そして

……

——もう、やめてくださいっ！

僕はいつの間にかまつろわぬ女媧の眼前に躍り出ていた。両手を広げて立ちふさがつて、すぐにひざと頭を垂れた。

僕はやっぱり凡人だった。

女媧の前でも、恩も怨もあるスミスが苦しめられているのを見てイイ気味だとあざ笑う心と、苦しむ彼を見たくない善性と罪悪感が心のなかに渦巻いていた。

けれど。

——僕は、僕のすべてをあなたに捧げますから！　もうこの人に手を出さないでください！

口から出た言葉は、まつろわぬ女媧への嘆願だった。

後ろで身じろぎする気配をかんた。だけど、僕はじつと目を閉じたままだった。

ナンジ、ソノミヲササゲルカ？

最後通牒だった。僕が女媧に喰われることへの。

霧がまとわりつくような女媧の声をはっきりと聞いた。きっと目を開ければ目と鼻の先に女媧の顔があるに違いなかった。

目を開ける勇氣はなくて、でも震える舌を動かした。

さ、ささげ……る……。

キシキシキシキシ。

歯を擦り合わせたような音が響いた、女媧の笑い声だった。

すぐに僕は喰われるものだと思っていたけれど、何を思ったかまつろわぬ女媧の姿は消え、くずおれる僕と倒れ伏したスミスだけがその場に残された。

ただ。

《font:ulll9》亜《font》

地面に月を指す絵文字があつて、月が現れるまでがタイムリミットなのだと悟った。

13. 死神

呻き声を上げつつける彼の元に僕はすがり寄った。早くなんとかしなきゃ……でも僕に医療の知識は全くなくて苦しむ彼にどうすればいいのか検討もつかなかった。

けれどでくの坊のように突っ立っているわけにはいかず、僕は手を伸ばして黒い仮面を取ろうとした。仮面を少し動かせばスミスの顎が見えた……ドス黒く、もとの肌なんて想像もつかないほど毒々しく染まった人肌が。

1番黒く染まっている場所は【頬】である時……僕に”逃げる”とサインを送って、攻撃を受けた場所だった。呪毒は下水のへどろじみて渦巻きながら頬から唇をつたって喉の奥へ流れ込んでいた。

指が頬に触れた途端、霊視が降りた。

これは呪いだ……精神の小さな綻びからじわじわと穴を広げ精神をなぶって苛める呪い。

きっと平常時ならなんの影響も及ぼさないとはいえず、いや、そもそも強固な自我をもつスミスにこんな呪いは無意味なはずだった。

仮面を持ち上げ、取り払おうとしたけれど、さえぎられた。スミスに腕をつかまれていた……意外なほど華奢な手で、添えるような儂い力で。

アマリリス……あなたなの？　もう目が霞んで何も見えないの……。

スミスの声はこれまでの彼の男性的なテノールではなかった。女性的などか母性を感じさせるアルト。

僕にこれまでとはべつの混乱が襲いかかった。こんな火急の事態なのに、気に留めることすら間違っているのに、突然降って湧いたスミスが”女性”かも知れないという可能性に、僕は動けなくなって喉を鳴らすことも出来なかった。

腕に添えられていた手が、今度は僕の頬に添えられた。皮手袋ごしだったけれど、ふしぎと体温を感じとれた。

あなたと旅に出たのは成り行きで、初めは私も警戒していたわ。

だつて……わたしたちと、神に連なる者あなた達は宿敵同士……どこまで行つても平行線で変わる事のない関係だもの。

スミスの言葉は弱弱しくて、僕は聞き逃さないよう石像になった。心音が邪魔でしかたなかった。

あなたと行動していたのも義務感でしかたなかった。でも……あなたが初めて笑ったとき、あなたに情を抱いてしまったのね……私は孤高の王で……でも今、あなたが傍に居てくれているのがとても嬉しいもの。

春と夏を旅して、あなたは何度も問いかけたわね……願いはなかった。私は、私の願いは自分で叶える性分だったし、あなたは全てを捧げる願望器だったから……決して口にすることも思うこともしなかった。

それは追憶、走馬灯のなかでスミスは、アマリスとの過去をしずかに口した。あの強者であるスミスが心折られる要因となった小さな綻びとは、きつと僕らだった。

……でもアマリス。私はあなたと旅をして、言葉を交わして、心を通わすうちに、ひとつのことを願うようになっていたわ。

僕にはひとつの心当たりがあった。

願望器であるアマリスは思考ですら汲み取つて望みを叶えてしまふ。神様ですらそれが発揮されるならスミスであつても例外ではない、けれどアマリスとスミスの間に願いを叶えた雰囲気はなかった。

願望器であるアマリスが唯一願いを叶えられない願い。それは……。

アマリス……どうか、あなたはしあわせになつて。

そうだ。アマリスへの願いだ。

全てを捧げる存在であるアマリスは決して自分を勘定にはいれない。それが願われたものだろうと、死が目前に迫つていても。困つたように、嬉しそうに、微笑むだけだ……。

でも、ごめんなさい。

私は女媧を倒せず、最期まであなたを護れなかった。だから………

——君が、やるんだ。

仮面の王が僕の襟を掴んで引き寄せた。有無を許さない力で。

その時には女性的な雰囲気などスミスから消し飛んでいた。あるのは雄々しい覇気のみ。

バイザーの内にある彼の眼光を見た気がした。どれだけ心を折られようと屈する事の無い眼光。彼が冥王^{ブルート}と呼ばれる真の所以を、僕は本当の意味で知ったのだ。

無理です……僕にどうしろって言うんですか………！

だからこそ僕はイエスを言えなかった。言えるはずがなかった。

あんなバケモノ、貴方がでなければ倒し得ない！ 僕になんかに！
だってスミスにだって成しえなかった女媧討伐を果たせというのだ、今のスミスを前にするほど、奮起しなければいけないのに僕の心は萎えていった。

襟を掴んでいた力が緩まった。やさしく頭を撫でられて髪を梳かれた。

安心したまえ、すべてのピースは揃っている……。私の敗北もまたその一つ……予定調和なのだ。

予定調和……？

そうだ……この世界はひとつの舞台なのだ……我々は壮大な演目を演じ、人は人生においてひとつの役を負っているものさ。

僕にはスミスの言っている事が欠片も理解できなかった。だけどスミスは満足したように体を横たえて空を見上げた。

古き王はここで倒れ、そして君に託す事が、私の役目だったようだ。

なにを……僕がそう聞くより早く、スミスは懐からとある物を取り出した。

皮の手袋から黒く染まりきった血が滴り落ちていた……まるで彼の終焉を示すかのように。その手には、武骨で厳めしい鋼色のリボルバー式の銃。スミスを象徴とする、神殺しの銚だった。

私のアルテミスより篡奪した権能は、一月に6発の魔弾を撃てる権能だ……。

一月に一度、神を穿つ魔弾を手に入れる権能、それが何度もみたスミスの魔弾の正体だった。

まだ……ひとつの弾丸が残っている……。

私が傍に居れば……君は引き金を引ける……しかし私はもうすぐ冥府へ帰るだろう……。だが私が滅ぼうと、此処に籠められた私の魂は……人の魂は、決して滅びはしない……。

勝ちたまえ、アキ。

それがスミスの残した最後の言葉だった。彼の身体は現世に繋ぎとめられず、風船がしぼむように衣装から重みが消えていた。

あとに残ったものは主を失い、転がった仮面とくずおれた衣装のみ。

悟った。冥王は闇へと還つたのだと。

それでも僕には無理です……。

弱い僕はあなたに付きまとして、足を引っ張って……挙げ句の果てにはこんな結末を招いた……！

そんな僕なんか……貴方は何を求めているんですかっ！

どこまでも身勝手な人だった。

こんな事になった原因を持ちこんでおいて、それなのに遅れてやってきて美味しいところを持っていく。最後には僕にすべてを押し付けて去っていった。

でも、それが贖罪になるのなら。あなたが——望むなら。

アマリリスの身体が望みを叶えようと泡立った。けれどそれより強く僕は奮い立った。心と体は合致し、僕らは競いあうように同じ方向へ向かっていた。

僕は——

主を失った仮面を、手に取った。

14. 節制

人が神に対抗できる手段は限りなく少ない。

まつろわぬ神とは結局のところ天災だ。人が隕石を殴り倒せないように、地震を鎮められないように、噴火する火山を斬り伏せられないように、抗いようもなく受け入れるべき真実なのだ。

けれど。それでも。

僕はまつろわぬ神に立ち向かわなければいけなかった。

幸運なことに僕の手札には神にだって通用しうる切り札はあった。

それはひとつの才能。日常のなかでは決して見出せない、非日常なかで見つけた……いや芽生えた才能だった。

その才能は檻の中で最大限に発揮されまつろわぬ神である女媧ですら欺き、神に対抗しえると証明された。それは自分を他人だと思いつつ、自分を流し込む狂気を。

僕がアマリリスとなるために自己を捨て去って誰でもない者となる事によって生まれた、誰でもない僕だけが持ち得る才能だった。

自己を見失った空っぽの器に、べつの誰かなのだと狂信的に暗示をかけ他人を流し込む狂気を。

自分も神様も欺いてしまう、すべてを偽る者に僕はなるのだ。

それを使えば、僕はまつろわぬ女媧を欺き、一発の弾丸を打ち込めるのではと考えた。

なにせまつろわぬ女媧は幽霊のような存在だ。肉体的な目をもっていないはず、なら、ほかに考えられるなら霊的な視力をもっていると考えるのが妥当だ。

そうして僕はスミスの衣装を着こんで、スミスを演じながら、まつろわぬ女媧の塔に乗り込んでいた。

かつん。

恐怖と不安が両耳の鼓膜のちかくで煩いほどざわついて、引き返さうとささやいた。いつものことだ。彼らは牢に閉じ込められた時か

ら僕のすぐそばに居て、情けない僕をさらに不甲斐なくさせた。でも退くわけにはいかなかった。

ああ、それに絶好の機会じゃないか。

僕はいままでまつろわぬ女媧にいい様にされた借りがある、これを返さないでいい筈がないし、横からかすめられるのも気に入らない。

懐にある唯一振るえる権能の存在を、熱として認識できた。スミスから譲り受けた神殺しの銚が、武者震いをするかのごとく胎動していた。

かつん。

人である僕が勝てるのだろうか、一矢報えたら御の字だと思う。でも僕には、そう分の悪い賭けだと思えなかった。

スミスのいった予定調和という言葉にすがっているだけかもしれない。だけど負けるつもりも毛頭なかった。

……そうだ、今は記憶が薄れてしまっているが僕がはじめて神を弑逆したときの感覚に似ていた。あのときは不安を胸に、そろりそろりと進んで、少しの高揚が私の背中を押していた。

かつん。

鉄鉾の歩みが石の回廊に反響し、丸窓をぬけて空へ溶けた。外はもう陽が落ちる寸前だ。

まつろわぬ女媧の定めた刻限は夜。……逢魔が時をすぎて、闇と魔の時間。つまりかの女神の本領だ。今この時より、まつろわぬ女媧はもつとも力を増す。

私が相手にするのはこれまでとは一線を画す全力の女媧となるだろう。臆すれば、先刻のごとく呑まれること請け合いだ。

しかし私の胸中に恐怖など微塵もありはしなかった。

まつろわぬ女媧は私の存在に気付いているだろう。なにせ此処は

彼奴の本拠たる塔なのだ、できない道理はない。

しかし私はこうして奥深くまで入りこめている。私ではここまで行かなかつただろう……だが贅たるアキであつたならば素通りがで
きる。

故に私は限界までアキを演じなければならなかつた。

そして私はここまで辿り着いた。

重厚な扉を開け放つて、羽織つた長いケープを翻す。

さあ、^{冥王}私の時間を始めよう。

15. 悪魔

——我が冥王の名が示すがごとく。女媧よ、君が葬り去った冥府の王は死より帰還したぞ。

凄絶な威の籠ったテノールが女媧に突き刺さった。

驚愕か、興奮か、それとも恐怖か。絶叫とともにまつろわぬ女媧がとぐろを巻く。

——貴様が顕れてから随分と多くのものが喪われた……。これでこの因縁も終わりにしたいものだな。

私のつぶやきに呼応するように女媧が壮絶な叫びをあげた。ただの叫びではない、常人が耳にすればたちまち心を壊してしまう狂声だ。

——無意味だ。

しかし私にその類の攻撃は一切通用しない。今の私に精神的な穴はなく鉄壁を誇っていた。前回のような下手は打たない。

1歩を踏み出す。次いで異変が襲った。

——時間が停滞した。時間が空恐ろしいほど緩慢としたものとなり、最後には停止した。いや、正確にはそうではない。体内時計で測ると1秒をおよそ1万年に変えられていた。

不朽不変。

おそらく神に連なるものですら消滅してしまう幾星霜のなかで、自我を強化し、数十回ほどダメになった自我を捨てながら一切の変化をせず1歩を踏みしめた。

今度は——灼熱の大紅蓮が痛覚と視界を覆い尽くした。

太陽か。瞬きの呼吸が鼻を融かし、気管は爛れて、肺は燃えた。

不撓不屈。

このジョン・プルート・スマスはあらゆる困難に打ち勝つ力と、それに見合う頑丈な肉体がある。ならばこんな火の粉、私には届かない。

数百回ほどダメになった自我を消し飛ばして再編してながら1歩を進めた。

今度は目の前に——アマリリスがいた。

肉体が欠けて果てて、空洞となった眼窩と空色の右瞳が、じつとこちらを見ていた。幼児のように手を伸ばして、救いを乞うように、涙をこぼした。

頑迷固陋。

怒りが全身を焼いた。これほどの侮辱があるだろうか、護れなかつた者の記憶を持ちだして、使喚させ、逝ってしまった者の尊厳を辱める。

あつてはならない。許してはならない。まつろわぬ女媧。

私はさらに1歩を踏みだした。

まつろわぬ女媧の齎すあらゆる困難を、あの時の僕はジョン・ブルート・スミスになる事によってくぐり抜けた。時が経つほどスミスに近づいていき、それと共に僕はさらなる段階に進むことが許された。

罅が明かないと悟ったのか、まつろわぬ女媧は物理的な手段に訴えかけた。女媧が地面にひろがる影に触れると影が体積を増し、無数の腕が生えた。

女媧は人類を創造した人の生を司る神だ。

しかし生と死は表裏一体であり輝かしい生を司る神は、死の先にある極寒の荒れ野を統べる神でもあった。死に満ちた腕はたとえ私でも触れてしまえば如何に私でも危うい代物だった。対抗する手段は………。

——ビフロンス。

脳裏にひとつの霊視が蘇った。

霊視と記憶に導かれるまま私は身をゆだねた。臍下丹田にうずまく生命力が目減りして自己と世界の境界が曖昧になっていく。

その時の私は、自分から見ても他人から見ても、もやがかかったように虚ろだった。

『^{Formless Spawn}形なきもの』。過去に私がとあるまつろわぬ神から篡奪した、あらゆるものを曖昧にする権能だ。

後に知ったけれど、これは決して権能ではなかった。

神に届かぬ身の人間たちが、見様見真似で神の御業を得ようとした技のひとつであり、僕がはじめて僕の意味で行使した——魔術であった。

私は自己を曖昧にし、影の腕を透過した。一度成功すればあとは繰り返すのみ……影腕の剣山をもものともせず、最奥に坐するまつろわぬ女媧へ肉薄した。

まつろわぬ女媧もまた猛然と呐喊した。その威容はまさに悪神さながらで、しかし、私も臆することなく揺るぎない前進で応えた。

……その時の僕は、完全なほど、完全無欠なほど”ジョンブルートスミス”だった。

Woooooooooooooooooooo!!!

獣じみた唸り声は女媧ではなく私のもの。手中の銃を剣とすることごとく突きつけ、照準をさだめ指が引き金を——引くことは、できなかった。

ゾツと。

身が強ばり竦むほどの冷気が、頬を起点に全身を刺し貫いていた。まるで氷でできた棘の花が全血管のなかで花開いたようだった。

肺からせり出されら呼吸を白く変える冷気が、私というスミスの外皮を剥ぎ取って、剥き出しの僕がさらけ出されて放り出されてしまった。

あと少しでまつろわぬ女媧へ弾丸を叩き込めたのに、身体は蠟で固められたようにピクリともしなかった。

あ……。

どうして？ と疑問をいだくより早く、僕は気づいて間拔けたように口をあけてしまった。

頬。……そこはスミスの死因となった傷と同じ場所だったんだ。

演技に暗示とは結局、観測した彼を元にする。なら、僕が見た最後の彼は呪いを受けていて……呪いすら再現してしまうのも道理だった。僕は完全に模倣しすぎていたんだ。

思えば女媧は僕のことをスミスへ近づけるためわざと煽っていた事に今更ながら気づいた。女媧に知恵や知性はない。しかし悪辣さと狡猾さは反吐が出るほど優れてるのは嫌というほど知っていた。

そして悟った事実と、それを元に先の未来がみえて諦観を抱いた。

……崩壊は一瞬だった。

まつろわぬ女媧がスミスの銃を吹き飛ばし、交尾をはじめ蛇のよう……いや、獲物を丸呑みにする大蛇さながらに僕を絡め取った。もう僕に対抗の手段も、抵抗の意味もなかった。黒髪で隠されていた面貌があらわれ、瞳孔が縦にひらいた眼に僕が映り込んだ。

かのゴルゴンの瞳に囚われたかのように僕はピクリともうごけなくなつた。いや……違う。まつろわぬ女媧の眼窩にうまる空色の瞳を、見たことがあつた。あれを見たのは、この塔の中で、牢の中で。

ああ、あれはアマリリスの瞳だった。

僕とアマリリスをつなぎ合わせて”僕”ができたならその半分はどこへいく？ 答えはまつろわぬ女媧で示されていた。

僕のゆがみ切った表情がなよりの好物だというようにまつろわぬ女媧が口を横に裂いてわらった。そして情事の睦言とおなじ温度の言葉を僕に落とすのだ。

アイセ。ツガイトナレ。ワガ、ホウギ……ホウギ……。

言葉は毒で、毒が血を通って染みいるように、言葉は脳を侵した。呪言を少しでも跳ね除けようとした脳が、耳から血を流す。それでも

止める事は決してない。

日はもう光も差さないほどに墜ちきつて、月光のみが光だった。刻限が訪れた。誓約が果たされる時はきた。

僕 絶 叫 が 木 霊 し た

16. 塔

空が点滅していた。

正確には月と太陽が凄まじい速さで疾走していた。地球の自転が早まったわけではなくて、単純に時が加速していた。

刹那のうちに万物の誕生と終焉が繰り返され、土へと還っていった。そこに無機物有機物の差はない。まさに人類には到底なし得ない神の御業。

……完全なる女媧による創世が始まったのだ。
時も生も死も、まつろわぬ女媧の下僕だった。

当然だ、女媧は天地創成の権能を取り戻したのだから……酸鼻きわまる悪辣さと妄執によつて。

”陰陽の結合が万物を生む”

道教における基本思想で、天地開闢を可能とする一から二を生ずる権能を得るには陰陽を内包する”陰陽一体”の存在でなければならなかった。

もともと女媧は一柱で人類創造と天地補修を為した神。

”陰陽一体”が本来のすがたでこれまでのまつろわぬ女媧は陰のみの”影”でしかなかった。

けれどそれも過去になった。

陽であり完全性を秘めた僕が女媧と溶け合ったことでまつろわぬ女媧は完全へと至ってしまった。

神話における女媧は1柱のみで人類を生み出し、崩れた天地を補修した神でもあるなら、その逆の権能もまた持っていた。

6つの大陸がひとつになっていく……大陸のぶつかり合う轟音はどこか鐘の音に似ていた。

地上のあらゆる場所で落雷が降りそそぎ、極大の稲妻が女媧の本拠で僕らを捕らえていた塔に直撃した。塔はあっけなく崩れ去って、森や石くれと同じように土へ還った。

崩れ去る塔のなかにあってしかし地面へ落ちることなく、風雨にさ

らされながら滞空していたまつろわぬ女媧にして完全なる女媧は、万雷の禍いのなかで——絶叫した。

往古之時、四極廢、九州裂。

それは唄だった。女神復権の祝詞であり、復讐怨嗟の呪歌だった。

一節を紡ぐごとに空と大地の境界が砕け、洪水を呼ぶ女媧の唄が世界に満ち満ちた。女神の言葉をこの世の真実にするために、天は落ち、大地は裂け、人々は歓喜の歌を捧げた。

天不兼覆、地不周載、火？炎而不滅，水浩洋而不息。

真円を描いていた青い星が……破れる。

球状の惑星だったものは故事に語られる平らな土地へと変貌を遂げ、土地のあちこちで火の手が上がり緑は消えた。

そしてその合間を縫うように洪水があらゆるものを飲み込んだ。

猛獸食顛民、鷲鳥攫老弱。

かすかに生き残った人々にも安寧はなかった。どこからともなく現れた渾沌、窮奇、饕餮、檮杌、鬼に竜……人では抗し得ない神獣と呼ばれる神の眷属が、容赦なく喉を喰い破り臓腑を引きずりだし引き裂いた。

世界の神話のなかに散見されるハルマゲドンを代表とする終末神話の再現だった。すべてが崩壊していく様子を誰もが例外なく指をくわえて見ているしかなかった。

ひとつとなった大陸に巨大な亀裂が走っていく。地震とともに大地が盛り上がってまつろわぬ女媧女媧の面貌を描いた。

ずるりと大海から大陸が引き抜かれた。

女媧はゆっくりと浮き上がり、雲を掻き乱し、成層圏を抜け、宇宙へとたどり着くと、月を喰らった。

女媧は月もなった。月は女媧だった。

偽りの月が顕現する。

唇に位置する部分がわなないて、最後の一節が紡がれた。

上際九天、下契黄墟、名声被後世、光輝重万物。

——ここに万物は女媧の手に落ちた。

そうして僕は月にいた。

偽りの月のなかで僕はありとあらゆる物が破壊されていく様を微
睡みと絶望の中で、ぼうつと見ていることしか出来なかった。

女媧に呑まれたあと僕がいたのは真つ白な空間だった。

まわりには僕という存在しかいなくて、母の胎内でゆれる胎児のよ
うに身体を丸めて、ここにたどり着くまでの過去を思い出して無意味
に後悔を重ねていた。

情けなかった。

無様だった。

あの人の意思を継いだのに、願われたのに、望まれたのに、ひとつ
として叶えられない僕がいつそうに情けなくて希死念慮に囚われた。

——大丈夫。まだ希望はあるよ。

優しいな声に振り向けば緋色の少女がいた。アマリリスだった。

17. 星

大丈夫。まだなんとかなるよ。

アマリリス……なんで、君が？

柔らかな声とともに現れたのは僕が何よりも助けたいと願った少女アマリリスだった。けれど彼女の精神はまつろわぬ女媧に捧げられ消えたはず。

なのになぜ？ 僕の心に疑問が生まれて、けれど、ふしぎと驚きは少なかった。

僕の疑問と戸惑いを悟ったようにアマリリスは淡い笑みを浮かべた。

きつとね、これまで歩みは間違いじゃなかったんだと思う。ううん……それどころか色んな可能性のなかで、私たちがここにたどり着いた今が、唯一の正解だったんだよ。

正解って……何言ってるのさ。僕たちは負けて女媧の贄にされちやつたじゃないか。世界だってもうダメになった、なにが正解だつていうのさ。

僕の突き放した物言いにアマリリスは気分を害した様子もなく、しずかにほほ笑んでいた。ちゃんと温度のある笑みだった。

私たちは確かにまつろわぬ女媧に取り込まれた……だけどそれは死んだって事じゃないの。

だって女媧は捧げものを食べるだけ。その条件はまつろわぬ女媧がわたしを介して顕れたまつろわぬ神である限り決して変わらない。

それにアキは女媧に捧げたって言ったけど、わたしたちは本当のところ総てを捧げきつてはいないの……だからわたしたちはまだ終わってない。だからこうして2人とも意識を保っていられてる。

捧げきつていない？ ……でも僕たちは女媧に約束して、その結果呑み込まれたじゃないか。

うん。確かに女媧に呑み込まれたのも真実。

だけどね、アキはわたしにすべてを捧げてくれたでしょ？ それが答えだよ。

思い出した。僕は彼女があの手でかけろうのように果てていくなかでアマリリスの無事を願って、僕自身を捧げた。

”僕が、すべてをキミにささげるから、キミは大丈夫”と。……それは僕らが一つになる要因にもなったけれど。

アマリリスは僕の思考を汲み取ったようにうなずいた。

あなたがわたしに捧げてくれたから、私もあなたへ捧げることができた。まっろわぬ女媧へ捧げないですんだ。

思い出して、わたしたちが捧げたのは決して女媧のためじゃない。わたしたちが捧げたのは本来わたしたち自身のため。

それはそうだ、何より助けたいと思ったのはアマリリスなのだから。女媧なんかのためじゃない。

不完全なまっろわぬ女媧が贄をすべて貪るには身体と心から捧げたいって思わなくちゃダメなの。でもわたしたちが捧げものをしたとき、全然別の方向を向いていた。

だから女媧はね、わたしたちの捧げものを横からかすめ取ることはできても、本当の意味で喰らうことはできなかつたの。……だからわたしもアキも、髪の毛一本、女媧には渡してないんだよ？

髪の毛の一本も？

ええ、アキも知ってるでしょ？ わたしの総ては今まで誰かの願いを叶えた分だけ取り戻せるって。だからわたしのすべてはあなたのもので、あなたのすべてはわたしのもの。

記憶の中に心当たりがあった。スミスと会話していたジョーという博士が語っていた最後にこう言っていた。アマリリスを止める最後の方法、それは彼女が総てを捧げたいと願ったときにあると。

僕は驚いてアマリリスを見やった。

わたしは貴方に返したいと思った。

だって願いを叶えるだけの人形だったわたしに、すべてを捧げてくれたのはあなただけだったから。嬉しいって感情を本当の意味で識

ることができたから……だから……。

ちがう……ちがうよ！ 僕は君が人間だって思っていた、それに殺そうとだってしたじゃないか！ 僕はダメなんだ、君にそんなに想ってもらおう資格なんてない……凡人で役に立たなくて……それしか出来なくて、もつと素晴らしい人間ならって……！

そんな事言わないでよ。あなたの答えは逃げだったかもしれない、投げやりだったかもしれない……でもね、その言葉をくれたのはあなただけで、最後までわたしに寄り添ってくれたのはあなただけで。だからそれがわたしだけの真実。

アマリリスはうつむく僕の手を取った。僕とおなじ速度でながれる命の鼓動を感じた。

両手を繋いだまま、僕たちは眼下にひろがる世界を見下ろした。

女媧が大陸の大部分を持ってしまったから平たい土地の大半は海で、ぽつりぽつりだけ茶色い陸地が点在していた。人が決して生きられる環境じゃないことは陸地に降りなくても分かった。

偽りの月と太陽が空にあって、まつろわぬ女媧が不動の君主として世界に在った——でも、僕たちは生きたい。まだ死んでいないというのなら、全力で抗って自由に生きたい。囚われたまま終わってしまう生になんの意味があるんだ。

大丈夫、逆転の一手はあるよ。

まつろわぬ女媧は万物を生み出す”究極の一”ともいえる完全な存在になってしまった。

でも、だからこそ、抜け出すことのできない法則にはまってしまう。万物を生み出すものもまた、万物なければならぬ絶対の掟に。すべてのものには陰と陽がある。

だからこそ陰のみだった女媧は陽の因子を求め、僕を取りこみ陰陽一対となった女媧は、天地創成をおこなえるほど究極にして完全なる存在へと至った。

でも、だからこそ、いまの女媧にもまた陰陽があつて、万物そのものだった。

そして陰陽が万物にあるならば、僕らにだって。

誰でもない僕は——誰にでもなれる僕。

全てを捧げられたわたしは——全てを捧げるわたし。

誰にでもなれるあなたと全てを捧げられた私が、まつろわぬ女媧によつて合わさったからわたしたちは二つの要素が組み合わさつて——すべてを偽る者になつた。

だからこそ、アキはスミスを演じることができて、一時とはいえ神にも抗えた。

うん、でも負けちゃつたけどね。

だからこそ敗北を知つたすべてを偽る者という相は、陰の相を決定づけられた。

陰があれば陽もある。敗北があれば勝利もある。

陰が陽となるとき、わたしたちはすべてを偽るものからすべて真実に変えるものへと——全能の力を勝ち取ることができる。

ただの言葉遊びかもしれない。

でもね、名前はわたしたち”神に連なる者”にとつて大きな意味を持つもの。

……でも僕らは陰のまま、此処から出る手立てもないんだよ？

大丈夫、両方ともいつぺんに解決する方法はちゃんとあるから。

……ねえ、憶えてない？ 女媧つて人を生み出した神様なんだよ。だから女媧のなかは赤ん坊がいるような胎内と同じ意味を持つているの。

加えて今の女媧は陰と陽を内包する万物を生み出せる存在。

なら、産んでもらおうわたしたちを。生まれる前の、胎内にいるわたしたちは陰の極みにいるようなものだから、ちよと小突くだけでも変化は起きるよ。そして生を受ける事によつて、完全に陽へと転化できるから。

だから——わたしを受け入れて。わたしが死んでからずっとアキはわたしを拒絶していた。

それはきつと、わたしが死んでしまったせいで、死んだって事実を認めたくなかったから。

ああ、そうだ。僕はずっとアマリリスを拒絶していた。

そんなことをすれば心は壊れてしまっただろうから。事実として受け止めただけで、受け入れてなんて、今この瞬間も否定し続けている。弱い自分を守るため、事実を事実だと認めなかった。

でも、それは同時にわたしを生かすことでもあったの。アキの中で眠っていたわたしはアキに死んだと認識されたら、死を定義されてしまうから。

だけど、もうその必要はないんだね。だって、君は、生きてる……！

うん……そしてあなたがわたしを受け入れて、わたしたちは陰の極点にたどり着く。そして陰陽の転化は起きて新生する。

わたしたちは”究極の一”から生まれるにふさわしい”調和する二”になれる。

うなずいた。

もう迷うことはしなかった。いつもそばにいた迷いも、恐怖も、戸惑いも、どこかへ去っていた。

視覚や聴覚、五感のすべてが失われていく。

神経や五感が消えていく感覚は、まつろわぬ女媧に身体のパーツを取られたときの感覚に少しだけ似ていた。けれど、それとはまったく異なるもの。願い願われた想いが、手をつたって、僕らという円環を駆け巡ってまばゆく輝いた。

もう誰にも邪魔はさせない。

僕は不器用にほほ笑んで、アマリリスが仄かに応えた。

——ひとつになろう。

——うん……あなたが望むならわたしは……。

僕たちは白に包まれていた。お互いがどこにいるのか見えも聞こえもしなかつたけれど、感じることはできた。僕らのなかの1番やわらかい場所をむき出しにして、僕たちは重なりあつた。心が触れ合う。

僕は彼女で彼女は僕で、僕たちは思考すら共有していた。

アマリスの想いが伝わってくる。スミスへの感謝と喪失感、僕への信愛と愛情、彼女自身の決意と安堵……それに——

——ああ……。アマリスの口から法悦の声と、一日千秋を焦がれた願いが叶つたに等しい想いが零れた。

わたしは……誰かに望まれたものを与えるだけ。

そう望まれたから。

そう造られたから。

私が私の意志で、決して欲することも、願うことも、出来なかつた……けれど。

——でも今は違うから。

貴方私は私貴方だから……だから——私アマリスは貴方アキに願います。

どうか勝利を。

——うん。アマリス……君が望むなら僕は……。

——さあ、僕わたしたちの時間をはじめよう——

——僕は産まれた。

海に飛びこんだような衝撃とともに時の濁流へふたたび引きずり込まれていくのが分かった。

外は宇宙だった。

当然だ、僕らの母体はまつろわぬ女媧で、女媧は宇宙にただよう月そのものだったから。

新生した僕たちの前へあらゆる生命が活動を停止する劣悪な環境が牙をむいた。真空の奪手が僕の身体から酸素を、皮膚を、血液を掠奪しようとする。

大丈夫、わたしたちは神性を備えてる。だからこれくらい耐えられるよ。

脳内にアマリリスの音が響き、その途端、劣悪な外界からの影響を受け付けなくなった。

まるで物流法則を超越した振る舞いをみせるこの体のデタラメさに舌を巻いた。

けれど僕は驚嘆も、歓喜も投げ捨てて、地球だったものへ向かった。なぜなら——。

後ろを振り向かなくてもわかった。

宇宙の無音状態でさえものともせず叫声を届かせるまつろわぬ女媧が僕らに迫っていた。

まだ距離はある！ でもすぐに追いつかれるっ！

僕は足場のない宇宙を蹴って、なりふり構わず疾走した。足場がない上に無重力状態でのダッシュは凄まじくやりにくい。まるでスキップをしているか、飛び立つことのできないブサイクな鳥のように情けなかった。

でも、それでも。

早く。速く。夙く。

あの暗い牢の温度を覚えている。こんな宇宙の温度よりずっと寒かった！僕はもうあそこになんて戻りたくない……ましてやアマ

リリスも一緒なんて……だから……もう捕まってなんて、やるもんかア——ッ!!!

僕の咆哮は無音の空間には響かない。だれも聞き届けることはない、
たったひとりを除いて。

——そう。それでいい。

——あなたは何者へなりたいかだけを願うだけでいい。そしてわたしは願いを捧げて、叶える力を与えるの。

僕が足掻くすぐうしろで、アマリリスは祈りを捧げた。敬虔な信徒のように、オラトリオを唱するオペラ歌手のように。

僕が全能者へと至ったと同時に、アマリリスもまたとある神の眷属としての本来の姿をとり戻していた。

その神は強大な存在でありながら、万民のために奉仕を定められ、用意された供物であった。ゆえにその神は万民の願いを見聞きし、神へ願いを捧げる人形を現世に送り込んだ。

ただ誤算があるとすれば、神話のなかの神が現世に現れればまつろわぬ性を宿す。

その法則は神に作られた人形も例外ではなく、ゆがめられてしまったのだ。その人形が人の願いを叶えてしまうのはまつろわぬ性で歪み、ベースとなった神に引っ張られたがゆえの副産物でしかなかった。

だから、これがアマリリスの神髄。

”人の願いを神に捧げること”こそ、彼女の本懐なのだから。

”神の子”の神性を勝ち取りし我らは、全能者として新生しここに完成した!

我が宿星に従い、而して我はいと高き神へ、愛するもの願いを我が意とともに知らしめよう!

万民と神の供物にして我が祖たるジズよ! 我らが父なる主よ!
あなたがたの子たるアマリリスが希う!

18. 月

偽りの月から地球へ、僕らは飛翔した。まつろわぬ女媧の重力を振り切って。

だけどあのまつろわぬ女媧が僕らの叛逆程度で滅びることはなかった。

確かに僕たちは捧げものを奪い返した。それは時間さえ飛び越えて、女媧が降臨するとき贄になった過去のアマリリスでも奪い返していた。

それを受けてなお女媧は神話の世界に変えることなく健在だった。完全なる女媧は世界の主にして万物の造物主。因果の逆転が起きようと呑み込めるほど強大な存在だった。

そして全能者となった僕らを産み落としたとしても未だその猛威と権勢に揺るぎはなかった。

宇宙は無音の空間で、でも轟音の変わりに不気味な波動を背に聞いた。

アキ！ 来るよ！

まつろわぬ女媧が視界を覆い尽すほど巨大な光線を射出したのだ。いや、よく目を凝らせば密集したおどろおどろしい腕の塊だと気づいた。

無茶苦茶だ！ 悪態をつかずにはいられなかった。前回戦った時にみせた影腕の剣山などアレに比べればかわいいものだ、いま迫りくる腕の塊は大海さながらだ。

逃げ場はない。

まだだ。

これくらい逆境、乗り越えてやる。

今の僕はもう敗北主義者になるつもりは毛頭なかった。あれは一度切り抜けたことがある、なら。

僕はひと息に自分へ潜りこみ、途端に世界から虚ろになった。

——それじゃあダメ。

以前と同じように魔術を行使しようとしてアマリリスの諭す声が

聞こえた。

自分だけ騙すだけじゃ、どれだけ逃げてでも文字通り世界を牛耳る女媧に捕まっちゃう。騙すなら自分も——世界も！

僕らは思考を共有している。ならアマリリスの考えも手に取るように分かった。

僕の才能とはつまり自分の書き換えに等しかった。自分という色を消してまっさらなキャンバスにかえ、誰かの色で染め上げる。

……けれどそれでは、足りない。同じ手は二度も女媧には通用しない。

自分を書き換えるだけでは不十分なら僕が選ぶべきは世界を書き換えなければならない……正確にいうなら事象の書き換えを。

無理難題にもほどがある。でも擬似的に”神の子”となり、全能者となった僕にやらできるはずだった。

自己が虚ろになって消えていく。

僕の肉体が露と消えた。

身体がほどけて、記憶がとけた。

あれ、ぼくは——いったいだれだった？

大丈夫。

あなたの傍にはわたしが付いてるから、消し去ってしまった自分を、再定義するの。

——さあ思い出して、あなたが何者だったのか

きれいなこえにいわれるがまま、ぼくはあたまをひねった。

……。

……。

……。

そうだ、思いだした……。

僕は田中秋文。14歳の日本人で、中学生だった。

それに僕には家族がいた。お父さんにお母さん。妹だって二人もいた。

せせこましいアパートに家族5人で住んで、いつもテレビの取り合いをしたり兄妹三人を押しこんだ子供部屋をうばいあつたり、でもゲームの最新機種はいつも買ってもらえて、なに不自由のない暮らしを送っていたんだ。

僕は学校に通う学生だった。

成績はそこそこで、内申点をいつも気にしていた。ちょっと偏屈だったけど友達だつていて、気が休まる時がないくらい騒がしくて、楽しかった日常を、思い出せる……僕の顔だつてすっかり思い出せる。

過去はちやんとあつたんだ……。

皮肉なものだった。

何者でもなかった僕は何者かであつた。僕を見つけることが出来なくて、何者かへなろうとしたとき何者だったのか思い出すことができたんだから。

でも……ごめん。

これじゃダメだから、僕はあなたたちを捨てます。僕は求めていたはずの過去をあつけなく捨てた。

指先からキラキラとした光が、虚空のなかへとけていった。思い出のすべたが色素をうしなつて灰色へ染まった。

少しだけ寂寥感をのこして、でも僕は振り向かなかつた。

過去の自分では彼女を……アマリリスを護れないから。

今の僕のとおりには何よりも大切なアマリリスがいるから。

だから。

僕は誰かだった田中秋文でも、誰でもないアキアキでもなく——アマリス、君の秋になる。

アマリスは春と夏に咲く花だ……だから季節の半分は冥王ブルートのそばにいた。

でも彼は僕に役目を譲り渡した。なら、僕は君が生きて、咲き誇れる秋になる。冬死だって乗り越えられる君へ、未来永劫、君と歩み続けていたいから！

これが僕だ！ そう意志を横溢させると、希薄だった意識が急速に上昇をはじめた。周りの景色がおもしろいように後ろへ飛んでいき、平たい土地へぐんぐんと近づいていく。

……光や稲妻にでもなった感覚だった。

——そうだよ、わたしたちはその領域にまで到った。今、稲妻とおなじ速度での土地へむかつてる。速さでも、時間でも、道のりでも、なんでもいい。たどり着くまでの過程を極限まで縮める事によって、わたしたちは到った。

これこそ神々と羅刹の王にのみ許された神域の速度——”神速”。あとは秋がどこへ行きたいか決めるだけ。それでわたしたちの権能は完成する。

なら、僕が”僕”になったときにもう権能は完成していたんだね。だって行きたい場所なんて最初からひとつしかないから。

——地球に降り立った。全身を縛める重力が心地いい。

僕が行きたかった場所はスミスと別離した場所で、僕がいる場所は森だった形跡がなにもない荒れ野だった。でも僕にはここがあつた場所だと確信した。

僕は走り出した。

周囲にはかつて山海経に綴られた妖魔や神々を彷彿とさせる神獣の群れがひしめき跳梁跋扈していて、まつろわぬ女媧の敵たる僕の道を阻んだ。

アマリス。

うん！

羽を広げて四方八方に羽根をまき散らした。それは円を描くように広がって、神獣たちを阻む壁となった。この羽根は異教の悪魔を滅ぼしてきた聖なる神から授かったもの、だったら破邪の性質をもっている。当たり前だった。いくら人間じゃ太刀打ちできない神獣でも一時の間、足止めする壁になる。

僕はひたすら走った。消耗がひどい……うまれたての身体で、無茶をやったんだ。まだ元気に走れているのが不思議なくらいだった。

ここだ！

僕は直感的に目的の場所を探りあてると、大きく手を振りかぶった。

それだけで地面にクレーターかと思まがうほどの大穴が開いた。女媧のもたらしした年月の長さは、大量の土砂が堆積するには十分な時間だった。

もう女媧は成層圏にたどり着いている。逃げ。

僕は開けた大穴にとびこみ、その最奥に転がっていた——スミスの銃を拾い上げた。

19. 太陽

月は……いや、空は女媧だった。

人が神に対抗する手段は限りなく少ない。けれどこの手にもつ銃は、神の喉元へ刃を突き付けられる類まれな鋒だった。

けれど完全なる女媧はただの神より位階が違った。

まつろわぬ神を弑逆できる十分な力をもった武器でも、いまの女媧を討滅するには至らない。

だけどスミスの銃なら……いや、スミスの権能なら可能性はあった。

女媧！ あなたは新たな世界を創るために何度——月を満ち欠けさせた！

女媧の創成には幾星霜の時がながれていて、月が何度満ち欠けしたかなんて数えるのも馬鹿らしい数になっていた。そしてスミスがアルテミスから篡奪した権能は、月の満ち欠けによって銃弾が増えていく。

だけどスミスの権能には最大6発という制約が存在した。

だから僕は全能の力で覆す。

今の全能である僕なら月の満ち欠けさせた因果を……天地創成した女媧へ因果を返せるはずだった。

空の女媧が雲を突き破って、僕を？み込まんばかりに大口をあけ手を伸ばした。僕はその光景を仰ぎ見ながら、恐れることも、逃げ出すこともなかった。

あなたは恐ろしかったんだ……。

どれだけ痛めつけようと、どんなに時間が流れようと、そして死してなお、決して朽ち果てないスミスの意志が……人の魂が！

だからこそあなたはスミスを倒したとき、すぐに僕を喰らわず安全な場所^塔で喰らおうとしたんだ！ それは完全な存在になっても変わらない！ そこへ逃げ^月だした！ スミスの魂の宿った銃をこの土地ごと残して、宇宙にまで逃げ出したんだ！

僕には……——理解るぞ。

女媧に何度も恐怖と絶望を味わされた僕だからこそ見抜けた、まつろわぬ女媧の恐怖。新生する前から決めていた。まつろわぬ女媧をたおすのなら女媧が唯一恐れていたあの銃しかない。

だから……！

内に残ったすべての力を一発の弾丸へと変えた。銃を持ち上げる力すら残っているか疑問なほど掛け値なしに。

保険なんて許してくれるほど、まつろわぬ女媧は甘い相手じゃないと骨の髄にまで刻まれていた。

恐ろしいほど力を秘めた弾丸が精製され、僕は膝をついた。

新生したときには掬っても掬ってもなくなる気がしなかった臍下丹田に脈動していた力の泉が、今は掘りつくして枯れてしまった井戸のようだった。

ごめん、アマリス。

勝手に命を使ってしまった……でもスミスの想いを、僕の命を、次へ繋ぐために——僕は！

ハウギイイイイ！ ワレヲオアイセエエ！

女媧はまだ僕に捧げさせようと狂っていた。もう時間がなかった。

早く、撃たなくちゃ……。

でも意識は消えかかって、肉体は限界を迎えていた。なにも不思議なことじゃない。

万物の主である女媧への反逆。

事象の改変に神速への到達。

神獣の封じ込め。

神殺しの弾丸の精製。

どれひとつとっても人には前代未聞の難事で、それを10分にも満たない時間で繰り返し返したのだ。そのツケを払わなければならなかつ

た。疑問を挟む余地なんてない。

「だけど、まだ……まだ終わっちゃいない！」

「まつろわぬ女媧……僕はお前を愛さない。僕が、愛するのは……故郷の家族に、友達と……——ううん」

それはダメだ。僕はあの時、過去を捨ててしまった。だからそんな言葉を吐くのは許されない。

力の一切を使い切ってしまったから神獣を抑えていた羽根の力が失われた。

神獣たちが猛然と走り寄って、僕を吹き飛ばした。体がバラバラになったかと錯覚するほどの衝撃が襲った。

スミスの仮面がはずれて緋色が舞った。視界が霞む。ミイラかと思まがうほど細くなった腕を無理やり酷使して、銃を持ち上げようとした。

「僕が……愛するのは、アマリリス……そして——」

神獣の牙が襲う。

ぶちりと音がして両足が食いちぎられていた。活力が急速に消えて、手の銃が重くて支えきれそうになかった。

あとちよつとなのに……僕は最後の最後で！

のどが動かさず嘆くこともできなくて、悔しさを幼子よりか弱い力で銃を握りしめた。

ふと……後ろから誰かに手を添えられた気がした。銃口がゆっくりと持ち上がって中天を向く。

——Lock, stock, and barrel. ぶつけられずべてを——

渾身の力で引き金を引いた。

「ジョン・プルート・スミスッあの人だけだッ！」

砲身から極大の光弾が解き放たれ、偽りの月は真なる月光に生まれ

20. 審判

まどろんでいた。

空は晴れていて、久しぶりに青空の日差しをほほに感じていた。

いい天気だね、というアマリリスの声が少し遠く聴こえた。

ごめんねアマリリス……僕の命は君の命でもあるのに。女媧を倒すためとはいえ僕が勝手に使ってしまった……。

そんなことないよ。だってあなたはわたしだもの、だから後悔も、恨むこともしてないよ。

それに言ったでしょ。わたしたちが生きてるこの歩んできた道こそどうしようもなく正解なんだって。あなたの選択は決して間違いない。じゃなかったの。

だってほら――

「あらあら。新しい私の子はとびっきりの変わり種みたいね」

落ちていきそうな意識を可憐な声がつなぎ止めた。誰だろう。

「はじめまして、わたしはパンドラ。」

あらゆる災厄と一掴みの希望を与える魔女、そしてすべてを与えるものよ……ふふ、なんのことか分からないって顔ね」

「でも私はあなたの軌跡をすべて見ていたわ。」

あなたが足掻く姿を、足掻いて足掻いたその先で神殺しを為した姿を――

「自分を知らないあなたが未知の世界に迷いこんで、惑わされ悲劇に遭い右往左往しながらも、それでも自我と最良を必死に探し続けた。」

頼るべき王と出会い、勝利を得たけれど、その先に待っていたのは酷薄な真実と破滅に別離。

自分と他者との価値観にゆれ、最後には自分を見出し、強大な敵へ立ち向かった。

1度は敗北して、全てが崩れ去ってしまったけれど希望を手にしそろりそろりと歩みを進め、そしてあなたはついに到った……！」

「本当なら全能者なんていう、人から外れて”神に連なる者”って
言っても過言じゃないあなたを私の義息に迎えるなんてこと、すつ
ごおおおく悩んじやうんだけど……でもね」

「——おめでとう。頑張りつづけたあなたへ私は最高の祝福を送るわ
！」

私は傍観者で、ただ見ていただけ。

けれどだからこそ私はあなたに裁定を下せて、あなたへご褒美をあ
げれちやう！」

「これよりあなたは新生するわ！」

災禍を詰められた蠱毒の壺に迷いこんだ貴方は、絶望の果てに
最後に残った希望を掴みとる権利を得たのだから！

さあ、偉業を成した彼に祝福を！ 大罪を犯した彼に怨嗟を！ 神
殺しを為した彼を言祝ぎ呪う祝福と憎悪の言霊を与えてちやうだい
！」

「——口惜しや」

声には聞き覚えがあつた。ただ声の主に思い至らなかつたのは、そ
の声を僕がまともに聞いたことがないからだつた。

「妾にまつろわぬ性がなかつたならばそこな小娘の場所には、妾が
おつたであろうに……」

声の主は女媧だつた。

僕らの前に現れた女媧に狂気はすこしも感じ取れなくて、手放しに
美しい女神だと驚嘆した。不遜さと慈悲深さを器用に両立させたい
まの女媧こそが真の姿なのだつた。

ただ、いまの女媧に力はほとんど感じなくて、もう幾ばくもせず
去ってしまうのだろうと悟つた。

「そなたらは天地開闢、人類創造、文明教化をなした比類なき太母たる
妾より権能を篡奪する。そして妾の死によって妾という軀は壊され、
そのあとに待つ渾沌と破壊がそなたらを苛むであろう。」

ならば我が権能、血肉と変えよ。

そしてそなたの身体は一度は妾に捧げられ、妾が産み落とし、ゆめゆめ傷つけることのなきよう……妾とふたたび相まみえるその時まで」

女媧の言葉はまつろわぬ性を喪ってなお、鋭いものだった。けれど僕には”また会うまで壮健であれ”と、そういつている気がした。

わだかまりや思うところが消えたなんて決してないけれど、なかおかしくなって僕が小さく笑うと、女媧はどこかすねたように顔をそらして空へ消えていった。あるべき場所へ、神話の世界へ帰ったのだ。

後に残ったのは僕たちとパンドラと名乗った少女だけだった。

”パンドラ様。このたびはかつて強大な太母神であられた御身に拝謁の栄を浴し、まことに歓喜の極みにございます。ですが僭越ながら問いただしたき儀がございます。

もしやわたしと秋はかの羅刹王とならぶ、恐るべき王たちの末席を占める運びになったのですか?”

アマリスがパンドラの前にでてどこか厳かな雰囲気で問いかけた。今のアマリスは僕のそばから離れていて、どこか幽霊のようだ。

「ええ、私と似た神性を宿すものよ。どのような経緯があっても神を殺した事実は変わらないもの。ふふ、アマリスといつたわね。そんなに畏まらないで、あなたもこの子だというのならわたしの義息同然だわ」

彼女のピンクの髪とアマリスの緋色の髪が揺れてどこか姉妹のようにも思えた。すべてを与える者とすべてを捧げる者、たしかに似ているのかもしれない。

パンドラの答えに絶句していたアマリスの代わりに僕が問いかけた。僕たちはいったい何になったのかと。

「神殺しの魔王よ、今風にいうならカンピオーネってやつかしら？
それは後々だつて知れることよ。」

さて用も済んだことだし、帰らなくちゃ。もつとあなたたちおしやべりしていたいけど、色々と制約が面倒なのよ。神話の世界から出張してきてるし、私も一応神様だし」

大雑把な人だなあ、と心でぼやきつつ、良くしてもらったみたいでありがとうございました。

僕がお礼をいうと、パンドラは微妙な顔をうかべた。え、なんで。

「アキはイイ子ね。ちよつと今後が心配になるくらい……。」

そうね、ちよつとだけお節介しておこうかしら？

いまあなたがいる世界はね、女媧様が大暴れしちゃったせいで元の世界から切り離された、いわば平行世界みたいなものよ。それに女媧様は時間まで狂わせちゃったから時間軸も数億年くらい未来なんじゃないかしら？ 私は神と人のいるところには必ず顕現する権能があるからそんな問題じゃないんだけど」

爆弾を落とされた。

「でもね、よく聞いて。世界が切り離されたのは確かにあの子が消えてしまったあとよ。でも私はスミスやアニーのママでもあるから、分かるの。あの子はねきつとどこかでひよっこり生きてるわ」

それって！ 詳しく問いただそうとしたけれどパンドラは笑うだけで柳のように躲かされてしまった。

「私は面白くなるようちよつかいはだすけど、基本的に傍観者なの。知りたいなら自分でね。」

じゃあアキ、アマリス。ママは帰るわね。……ふたりともその掴んだ手を離さないように」

そういつて微笑み、パンドラも女媧と同じように消えていった。

あとは僕らだけが残った。

僕たちの戦いは終わったのだ。

21. 世界

これからどうしよつか。自由になれたけれど目的もなにもないよ。パンドラが去ったあと、アマリリスが困ったように嬉しそうに笑った。影が差した雰囲気もなく血の通った表情で、僕にほのかに微笑んでいた。

目的なら、あるよ。僕は言い切った。

ちよつと時間はかかりそうだけど、生き残れたんだしやってみようと思う。……いままでてんやわんやだったから、これからはきつと平穩に決まってるだろうしね。

あはは、なにいつてるの。あたしたちは神様を弑逆して晴れてカンピオーネになっちゃったんだよ？　これから神様と戦わなくちゃいけないのは確定だよ？
えっ。

僕の淡い期待は全否定されてしまった。

なにそれ初耳なんだけど……パンドラって神様、ご褒美っていったよね……？　僕は困惑の視線をアマリリスに向けた。

ほ、ほら……神様って独善的などころがあるから……。アマリリスはスツと目を逸らした。

パンドラという神様に本当に感謝していいのか分からなくなりそうだった僕らは話題を変えることにした。晴天のひろがる景色は綺麗だったけど、殺風景でもあった。

ここどこだろう？　人って近くにいるのかなあ。

数億年先の、それも並行世界だもんね……神様だっていないかも……。あ、でも見て。

アマリリスが唐突に声をあげた。

空の一点を指さして、にっこり笑っていた。その先には青空があつてひとつの星が瞬いていた。

僕らの目は空が青くたつて、空に昇る星を見ることができた。

秋、あの星が牢のなかで見た北極星だよ。

幾星霜という長い時間のなかで定められた位置に張りつけられていた星は、その礫から解放されて自由な空へ瞬いていた。僕たちにはそれだけでもこの弥終の地に訪れた価値を見出せた。

よかつた探しじやないか、と笑いそうになったけどやめておいた。僕らは星を見つめ続けた。

……ねえ、アマリリス。僕は彼に……スミスに会いに行こうとおもう。それが僕の目的。

スミスはきつとどこかで生きてる。女媧をたおす瞬間にあの人を感じとれた、パンドラさんだつて言っていたんだ。それに冥府の王がエンマ大王の言うことを素直に従うとはおもえないしね。

でも、それは茨の道だよ。

わたしたちはここがどこなのかも、スミスの居場所だつてわかってない。

それだけじゃないよ、わたしたちは時間すら飛び越えて時間軸だつてわからない並行世界にいる。もとの世界だつて絶ッ対たどり着けないくらい遠い場所……それでも行くの？

うん。

僕は0・0001%を100%にする^{神の子}全能者ではなくなったけど、でも0%を覆せる^{カンピオーネ}可能性の獣になれたんだ。だから……。

そつか。

もうアマリリスはなににも言わなかった。

……ふと、眠気を感じた。

ちよつとだけねむくなつて来ちゃった。このまま寝てもいいかな……。

大丈夫。わたしは未来永劫、あなたのそばにいるから……だから今は眠つて……。

うん……おやすみアマリリス……。

後年、姿を晦ましていたロスの守護者は帰還する。

それが彼なのか彼女なのか、知るものは少ない。

仮面の王は何者で、仮面の下にどんな顔があるのか？

かの王の帰還とともに過去何度も議論された疑問にふたたび火が付き、その疑問に様々な憶測が飛び交った。

やはり精悍な美丈夫であるとか、いいや可憐な少女であるとか、美を尽くした天使だとか、武骨な益荒男であるとか……答えのでない推論はとどまるところを知らない。

けれど、ひとつだけ分かる事がある。

冥王^{ジョン・スミス}ながらの力で神々と戦い、誰^{ジョン・ドゥ}でもない誰かであり誰かである誰かであるかの魔王を、やはり人々は——”ジョン・プルート・スミス”と、そう呼ぶのだろう——。